



令和6年度指定 WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業

第2年次 研究開発報告書



茨城県立勝田中等教育学校

巻 頭 言

茨城県教育庁学校教育部高校教育課

課長 深澤 美紀代

令和7年度茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業開発研究報告書の刊行にあたり、本事業の推進に多大なる御理解と御協力を賜りました拠点校及び連携校の教職員の皆様、ならびに大学・企業・関係団体等の皆様に、心より御礼申し上げます。

コンソーシアムでは、「茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進」を構想の柱に掲げ、社会の急速な変化や人口減少といった課題に対応できる人財の育成を目指し、事業に取り組んでまいりました。多様な文化や価値観をもつ人々と協働しながら課題解決に取り組む力は、これからの社会を生きる高校生にとって不可欠な資質・能力であり、学校教育においてその育成を図ることは極めて重要です。

本事業では、茨城県立勝田中等教育学校を拠点校として、県内の県立中高一貫教育校13校が連携し、さらに大学や企業、関係機関と協働することで、「ダイバーシティ学びのネットワーク（DLネットワーク）」を構築してきました。学校単独では実現が難しい高度で多様な学びを、ネットワークの力によって共有・展開することにより、生徒一人一人に新たな学習機会を提供することができました。

今年度は、拠点校を中心に海外大学進学に向けた取組や海外大学体験研修、海外留学生の受入れなど、国際的な視点を養う学びを推進するとともに、高大連携による先取り履修や体験講座を通して、多文化共生を理論と実践の両面から学ぶ機会を整備しました。また、茨城県WWL高校生フォーラムでは、学校や学年を越えた生徒同士の交流と対話が生まれ、互いの経験や考えに触れる中で、新たな気づきや学びを深める姿が見られました。

先行きが不透明で、正解の見えにくい時代においては、他者との違いを理解し、尊重しながら、協働によって新たな価値を創造していく力が求められます。本事業を通して、生徒たちはその難しさと同時に、共に学ぶことの意義や学びの広がりを実感してきました。こうした経験は、将来、国内外のさまざまな場面で活躍するための確かな基盤となるものと考えております。

本報告書では、今年度実施した各事業の概要や成果に加え、拠点校におけるグローバルゼミをはじめとした探究的な学びの取組や、学校・地域・外部機関が連携して進めた実践についても紹介しています。本報告書が、本事業の成果を広く共有するとともに、本県における国際理解教育及びダイバーシティ教育の一層の充実に向けた一助となれば幸いです。

茨城県 WWL 拠点校からのご挨拶

茨城県立勝田中等教育学校

校長 下山田芳子

日頃より本校の教育活動に多大なご支援とご協力を賜っております関係の皆様には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

茨城県立勝田中等教育学校は、茨城県では3番目に開校する県立中等教育学校として、そしてひたちなか市では唯一の中高一貫教育校として、令和3年4月に開校しました。常陸那珂港などグローバル都市としてのインフラ機能を備え、国際港湾都市として成長を続けるひたちなか市から、「地域と世界をつないで地域創生に貢献するグローバルリーダー」を輩出するために、開校からの6年間、英語教育とグローバル教育を学びの両輪として探究活動を展開する学校づくりを進めてまいりました。その成果が認められ、令和6年度より茨城県初のワールド・ワイド・ラーニング(WWL)コンソーシアム構築支援事業の拠点校に指定されました。

本校では、令和6年度から令和8年度の3年間にわたり、「茨城県を未来型ダイバーシティ県にする教育の推進」をテーマに、国内外の大学や高校などと連携した高度な学びを展開する予定でしたが、文科省による事業整理により、この研究開発は急遽、令和7年度末で終了することとなりました。残念ながらたった2年間の研究開発となりましたが、短期間でも多くの成果を残すことができました。

研究開発初年度の令和6年度には、茨城大学グローバルエンゲージメントセンターと連携し、県内に住む外国人との共生をめぐる課題と解決策を探究する中で、解決策の一環として生徒が「防災運動会」を企画・運営しました。その取組が茨城県主催のいばらきドリームパスプラン(いわゆるビジネスプランコンテスト)で金賞を受賞するなど、大きな成果をあげることができました。

2年目の令和7年度には、「防災運動会」の取組を、茨城大学だけでなく、茨城高専や JICA とも連携して継続的に行いました。また、去年は本校だけで開催した「茨城県 WWL 高校生フォーラム」ですが、今年は連携校3校を含む4校から生徒の参加があり、お互いに刺激を受けながらグローバルな探究の成果を発表しあったり、パネルディスカッションをしたりしました。

また、海外への長期留学派遣や海外からの留学生の受け入れについても顕著な成果をあげています。令和6年度には本校から8名、令和7年度には4名の生徒たちがアメリカやカナダ等に長期留学に飛び立ち、その数は県内最多となっています。またヨーロッパやオーストラリアなどからの海外留学生の受け入れは、令和6年度は3名、令和7年度は5名となり、多くの生徒たちが日常的に異文化交流を体験しております。本年度は、生徒たち自身が海外留学生を支援し、交流を深めるための組織「留学生チューター制度」を立ち上げ、留学生の勉強の面倒を見たり、季節ごとの日本の行事を一緒に楽しんだりしています。そのおかげで、本校に留学した海外の生徒たちは皆「本当に楽しかった」と満足して帰国しています。

最後になりますが、茨城県教育委員会や本事業の事業協働機関の皆様をはじめ、心よくご支援・ご協力くださった国内外の大学・学校の皆様に深く御礼申し上げ、本事業を体験した茨城県の高校生たちが将来世界の平和の実現に貢献してくれることを祈念してご挨拶いたします。

巻頭言（高校教育課長）	1
（拠点校学校長）	2
目次	3
第1章 研究開発概要	5
第2章 管理機関の取組	
2.1 DL ネットワークの構築	15
2.2 茨城県高校生フォーラム（ダイバーシティ研修含む）	17
2.3 茨城大学の先取り履修	19
第3章 拠点校の研究開発の内容・活動実績	
3.1 海外留学	21
3.1.1 留学生からのレポート	23
3.2 高大連携	
3.2.1 海外大学体験研修（マレーシア・シンガポール）	25
3.2.2 国内大学視察（国際教養大）	27
3.2.3 茨城大学・常磐大学との連携プロジェクト	28
3.3 グローバルゼミ	
3.3.1 グローバルゼミ（4年次・5年次）	29
3.3.2 グローバルゼミ（3年次）	31
3.4 海外との交流・研修	
3.4.1 グローバルデイ（イタリア大使館）	32
3.4.2 オーストラリア研修	33
3.4.3 豪華客船おもてなし	34
3.4.4 オンライン交流	35
3.4.5 WSC への参加（ワールドスカラーズカップ）	36
3.4.6 全国高校生フォーラム	37
3.5 国内先進校への視察	
3.5.1 都立小石川中等教育学校	39
3.5.2 都立国際高等学校	40
第4章 連携校との取組	
4.1.1 柳井スカラーズキャラバン	41
4.2 各連携校からの報告	
県立日立第一高等学校	42
県立太田第一高等学校	42
県立水戸第一高等学校	44
県立鉾田第一高等学校	45
県立鹿島高等学校	46

	県立土浦第一高等学校	47
	県立竜ヶ崎第一高等学校	48
	県立下妻第一高等学校	49
	県立下館第一高等学校	50
	県立水海道第一高等学校	51
	県立並木中等教育学校	52
	県立古河中等教育学校	53
第5章	グローバル人材育成指標	
	5.1 グローバル人材育成指標	54
第6章	研究開発の成果と課題	
	6.1 研究開発の成果と課題	58
	資料1 令和7年度の実施内容	59
	資料2 掲載された新聞記事とチラシ	60

第1章 研究開発概要

以下は、令和6年度に「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）」の構想計画書として文科省に提出したものの抜粋である。

事業構想計画書

1. 事業拠点校名

学校名：茨城県立勝田中等教育学校

学校長名：下山田 芳子

2. 構想名

茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進

3. 構想概要

本事業では、現在の日本が直面する人口減少問題の解決の糸口となりうる「ダイバーシティ」を推進する教育を開発し、県内各地域に点在している県立中高一貫教育校13校を対象に「ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材」を育成するための「ダイバーシティ学びのネットワーク」を構築する。学校の小規模化・教員不足への対応によりダイバーシティ教育の内容の充実が難しくなっている状況を解決する策として、学校間ネットワークを生かし、拠点校が中心となって関係大学・地方自治体・企業・海外交流協力校などを結ぶ学びのネットワークを構築し、①世界標準の英語力②オープンマインド③ダイバーシティの知識・経験④リーダーシップの4つの資質・能力の育成を図るための取組を連携校と共有・共同実践し、開発した教育を事業後も継続できる土台作りを行うことで、未来型ダイバーシティ県を支える人材育成に資する。

4. 体制

関係機関・学校に関する情報								代表者・校長名
管理機関	茨城県教育委員会							柳橋 常喜
事業拠点校	茨城県立勝田中等教育学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)							下山田 芳子
	学科・コース名		1年	2年	3年	計	学校規模	
	対象	普通科・後期課程	115			115	0	
	対象外	前期課程	120	120	120	360	0	
							475	
事業共同実施校	①	なし (国・公・私)						
事業協働機関 (国内外の大学、企業、 国際機関等)	①	茨城大学 グローバルエンゲージメントセンター					池田 庸子	
	②	常磐大学 国際交流語学学習センター					坂場 由美子	
	③	株式会社WTOC					堂原 有美	
	④	社団法人 国際教育交流ネットワーク機構東京支部					本庄 伊吹	
	⑤	株式会社 アイエスエイ					平田 敏之	
	⑥	Global Exchange Education					大谷 敦子	
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	茨城県立日立第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					磯邊 裕一	
	②	茨城県立太田第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					谷津 勉	
	③	茨城県立水戸第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					御厩 祐司	
	④	茨城県立鉾田第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					飯山 美都子	
	⑤	茨城県立鹿島高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					小沼 浩幸	
	⑥	茨城県立竜ヶ崎第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					太田垣 淳一	
	⑦	茨城県立土浦第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					プラニコゲンドラ	
	⑧	茨城県立下館第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					木村 功	
	⑨	茨城県立下妻第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					生井 秀一	
	⑩	茨城県立水海道第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					福田 崇	
	⑪	茨城県立並木中等教育学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					柴崎 孝浩	
	⑫	茨城県立古河中等教育学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					中久喜 歩	

5. 申請を希望する理由

本事業で育成を目指すグローバル人材とは、「ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材」である。少子化や生産年齢人口の大幅減少については、以前から将来の日本が直面する大きな課題とされている。日本の歴史において、改革を必要とする時代に現れたリーダーは、海外の事情をよく知るグローバル人材であった。大化の改新後には、唐の律令政治をよく知る遣唐使、明治維新では、欧米に派遣された岩倉使節団の留学生など、実際に海外に渡り、そこで得た知識・経験をもとに、それらを日本の事情にあわせて改良・改善した人材が改革時のリーダーであった。未曾有の人口減少という、かつて直面したことのない事態に対応していかなければならない日本、そして30年後には約20%の人口減が推計されている茨城県の行政には、そうしたグローバル人材が必要である。将来的に行政を支える人材を多く輩出すると考えられる中高一貫教育校において、グローバル人材を育成するためのネットワークを構築することは、茨城県を未来型ダイバーシティ県とし、様々な課題を解決する人材を育成するための教育に資するものである。

また、学校の統廃合・小規模化が進む中で、教育の質を落とすことなく新しい教育の研究開発を共同開発する学校間連携を促進するためにも、本事業を通して学びのネットワークの構築を図りたい。

6. 管理機関の概要

(1) イノベティブなグローバル人材育成に関する計画、戦略

茨城県は、大井川和彦知事のもと、産業・農業・教育等様々な分野で数々のプロジェクトを施策化してきた。「外国人材活躍促進事業」や「茨城県産農産物のグローバル市場への進出」、「次世代グローバルリーダー育成事業」など、国内の少子化問題を踏まえて未来の労働力や市場の獲得をグローバルな視野で解決していこうという施策と並行して、他県に先駆けて取り組んでいるのが「ダイバーシティの推進」である。これから日本社会が直面する生産年齢人口の大幅な減少による労働力不足問題を、女性や若者、外国人などこれまで以上に多様な人材を活かしていくことで解決していくことがねらいである。

ダイバーシティを推進する本県において、実際にダイバーシティ先進国でその現実や課題を経験し、その経験を社会の仕組みに生かしていくことができる人材の育成は急務である。そこで本県では、そうした人材の輩出を目標としている中高一貫教育校のグローバル教育やSTEAM教育等、特色ある教育の推進のため、県独自の学校支援予算をあてる「チャレンジプロジェクト」を立ち上げ、中核となる学校の教育内容の構築の財政的支援を行ってきた。今回の拠点校である勝田中等教育学校に対しては、令和3年度より3年間、支援重点校に指定し、グローバル教育を特色とするKATSUTAビジョンの構築のための予算として、毎年約500万の支援を行ってきた。

(2) 過去5年間の取組実績

- ・高校生国連グローバルセミナー：自治体では唯一、国連大学と連携した全10回のプログラム
- ・次世代グローバルリーダー育成事業：オンラインでの英語講座やイングリッシュキャンプを実施
- ・いばらき海外留学支援事業：短期留学（10万円×50人）及び長期留学（100万円×2人）の支援
- ・外国語指導助手招致事業：県立高校のALTを40人（R1）から64人（R5）に段階的に増員
- ・ネイティブ英語教員の採用：過去5年間に9人のネイティブ教員を採用し質の高い授業を提供
- ・英語プレゼンテーションフォーラムや英語ディベート大会の開催

7. 事業拠点校の概要

(1) 管理機関における事業拠点校及び事業共同実施校の位置づけ

県内の中高一貫教育校13校のうち、特にグローバル教育を特色とする勝田中等教育学校を事業拠点校とし、海外留学生の派遣や受入れ・海外大学研修などのグローバル事業を開発し、そのノウハウを事業連携校12校と共有する。事業協同実施校はない。

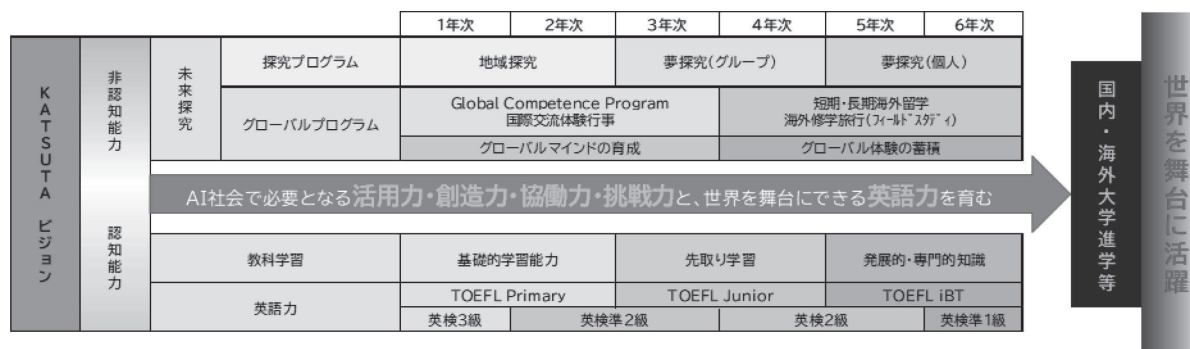
(2) 現状

a. イノベティブなグローバル人材育成に関する学校の教育理念

人口減少と高齢化という課題を抱えた日本社会は今、日本人に限らない多様な人材が活躍できる社会づくりを進めている。本校では、その多様な世界で活躍するための①世界標準の英語力②AIを活用することができる非認知能力（創造力・協働力・挑戦力）③リーダーシップと異文化適応能力の3つの資質・能力の育成を目指す。

b. 探究型学習に関する教育課程等の特色

主に非認知能力を育成する探究活動と学びのフィールドを広げるための英語力を学びの両輪とした「KATSUTA ビジョン」という6年間一貫の教育計画を実践している。



c. イノベティブなグローバル人材育成に向けた教育課程上の取組

① Global Competence Program (株式会社アイエスエイと共同開発)

中等前期課程の「総合的な学習の時間」の30時間を使い、外国人講師によるオールイングリッシュで、21世紀型スキル・グローバルに通用する知識・マインドセットを体得させるプログラム。アカデミックスキルとして、Design ThinkingやDiversityなどについて学ぶ。

② TOEFLを軸とした英語教育・語学教育

ネイティブスピーカー(県ALT)を4名配置しており、英語の全授業がネイティブスピーカーとのティームティーチングとなっている。特に中等前期課程においては、週5時間ある英語の授業のうち1時間は、TOEFL Primaryの準備として海外コースブックを活用した英語の授業を実施。その他、上記①の総合的な学習の時間や、英語と美術などの教科横断型授業を英語で行ったりするなどの部分的なEnglish Immersionを多く取り入れる他、前期課程で第二外国語体験を5時間組み込んでいる。

(3) 過去5年間の取組実績

a. 大学や企業、国際機関等と協働した主な取組

「多文化共生」に関する高大連携(茨城大学グローバル教育センター) / カナダ3州と海外留学に関する協定を締結 / マレーシアの3大学との指定校制度の提携 / 株式会社公文とグローバル教育に関する協定を締結

b. 国際性を高める取組

アメリカ公立高校交換留学奨学金プログラム / 文部科学省「#せかいぶ」加盟校

8. 構想目的・目標の設定

(1) イノベティブなグローバル人材像

現在の日本が直面する大幅な人口減少問題、そしてその解決の糸口となりうる「ダイバーシティの推進」に対応することができるリーダーとは、おそらく過去の大改革時と同様、すでに先進的に同様の問題に取り組んでいる海外の事情をよく知り、その解決に向けて世界のネットワークを有効活用することができる人材である。そのためには、①世界共通語である英語を自由に操り、②多種多様な人々と交わることができるオープンなマインドを有し、③グローバル課題に関してある程度学術的な知識を身に付けている必要がある。そして最終的には、茨城県の行政の中核にかかわり、④未来型ダイバーシティ県としての茨城県の未来をけん引できるリーダーシップを有していなければならない。

(2) ALネットワークの目的と役割

上記①～④の資質を有するグローバル人材の育成に必要な学びのネットワークを「ダイバーシティ学びのネットワーク(以下DLネットワーク)」と命名する。DLネットワークは、将来の日本、特に茨城県のダイバーシティ政策に貢献できる人材の育成を共に行う共同体である。主な役割は以下となる。

- ① 拠点校における「未来探究」グローバルゼミのカリキュラム開発
- ② 拠点校・連携校における留学生の派遣・受入れにかかる業務および留学促進のための取組
- ③ 拠点校・連携校における海外大学進学にかかる業務および海外大学進学の促進のための取組
- ④ 高校生がダイバーシティに関して知識を得たり体験したりする大学の講義の先取り履修

- ⑤拠点校・連携校における海外大学体験のための海外研修の企画・運営
- ⑥拠点校・連携校の生徒・教員対象のダイバーシティに関する研修の企画・運営

(3) 短期・中期・長期的な目標

①短期的目標（2024年度内）

- ア DLネットワーク内の連携校12校との連絡会議（DLネットワーク推進協議会）の開催
- イ DLネットワークの運営指導委員会の設置と第1回運営指導委員会の開催
- ウ 「ダイバーシティ」に関する講義の聴講に関する茨城大学との高大連携協定の締結
- エ 「ダイバーシティ」に関するワークショップを県との共催により企画・開催
- オ 連携校12校も含めた2025年度からの海外留学派遣と海外留学生の受入れの募集
- カ 海外留学派遣と海外留学生の受け入れ事務に関する連絡会議の開催
- キ 海外留学生を交えた校内高校生会議の開催

②中期的目標（2025～2026年）

- ア 連携校12校を含めたDLネットワークからの海外留学者20名以上
- イ 連携校12校を含めたDLネットワークにおける海外留学生の受入れ30名以上
- ウ 連携校12校を含めたDLネットワークからの海外大学体験研修の参加者20名以上
- エ 連携校12校を含めたDLネットワークからの高校生会議への参加者50名以上
- オ 連携校12校を含めたDLネットワークにおける「ダイバーシティ」に関する講義やワークショップの受講者100名以上
- カ DLネットワークの評価委員会の設置と委員会の開催

③長期的目標（2027～2034年）

- ア 連携校12校を含めたDLネットワークから海外大学進学者を10名以上
- イ 拠点校の海外大学進学率10%
- ウ 連携校12校を含めたDLネットワークの学校においてダイバーシティが進み、生徒の進路選択が多様化
- エ DLネットワークで学んだ生徒が社会人となり、日本のダイバーシティ推進に貢献できる職に就く
- オ 県内職員のダイバーシティ化が進み、ネイティブ教員の割合増

10 ALネットワークの形成

(1) ALネットワーク運営組織



ネットワークは以下の7つの構成団体で形成される。

- ①茨城県教育委員会
- ②茨城県立中高一貫教育校13校
- ③ダイバーシティを推進する企業
- ④ダイバーシティを研究する大学
- ⑤茨城県内の自治体
- ⑥ダイバーシティの推進に関わるNPO法人
- ⑦海外交流協力校

①DLネットワーク推進協議会

本WLL事業を推進する管理機関・拠点校・連携校に学校外の協力団体を加えたステークホルダーにより構成される。推進協議会の実質の開催は、②の連絡協議会と③の運営指導委員会に代替する。

②DLネットワーク連絡協議会

管理機関である茨城県教育委員会の高校教育課長のもとで、拠点校・連携校の代表者が出席して年1回行われる。WLL事業における基本的な実施内容の周知を行う。また、拠点校の勝田中等教育学校には事務局を置き、国際コーディネーターと事務補助員を配置する。企画・運営の実務は勝田中等教育学校の未来探究室が推進部となり、グローバル・スタディ係を中心に行う。

③運営指導委員会

管理機関である教育委員会、外部協力団体を中心とする DL ネットワークの構成団体、本事業の事務局を置く拠点校が一同に介し、本事業の企画・運営の計画・成果などを共有し、改善に向けた討議を重ねる委員会を年に2回開催する。

④DL ネットワーク評価（検証）委員会

令和7年度以降に、本事業の成果を評価・検証するための委員会を設置する。

- ・帰国後は英語の授業を取り出し授業とし、英語力を保つためのネイティブスピーカーによる個人指導を行うとともに、TOEFL や IELTS などの語学試験の受験のための準備をする。

1 1. 研究開発・実践

(1) カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次
未来探究 グローバルプログラム	短期国内活動		異文化体験 キャンプ <small>沖縄フィールドスタディ（現地外国人との「インガ」）</small>				
				English Camp			
	短期国外活動					アジアフィールドスタディ	
	短期海外研修			オーストラリア研修		マレーシア 海外大学体験 研修	
教育課程外の留学・研修					長期留学（1年・半年）		
					短期留学（ターム留学）		
					スプリング・サマーキャンプ		
					Mission on the Ground		
海外留学生の受け入れ					1学年1～3名		

※赤（必修） 緑（自由参加）

①短期・長期留学

拠点校では、カリキュラム上必須となっている短期・長期留学はない。海外留学には少なくない経済的負担が伴うため、あくまでも希望によるものと位置付けている。ただし、すべての短期・長期留学については、帰国後の留学審査で拠点校における学習と同等のものとみなされればすべて拠点校の履修単位として認められる。

②国外活動・海外研修

- ・フィールドスタディ 修学旅行として実施するものである。
- ・オーストラリア研修 20年以上交流を続けているオーストラリアの姉妹校ブロードフォードセカンダリーカレッジを10日間訪問し、現地授業に参加する。
- ・マレーシア海外大学体験研修 令和7年度より実施予定。マレーシアにある指定校連携を提携している大学と協力して、10日間程度、実際の大学生活を体験する研修。拠点校と連携校が共同で実施する予定。
- ・スプリング/サマーキャンプ 長期休暇中にカナダ等で行われる世界から集まる生徒とともに行う語学キャンプ。学校主催ではないがDLネットワークの協力団体による運営

(2) 外国人生徒の受け入れ及び体制の整備

海外留学生の受け入れについては、DL ネットワークの Global Exchange Education と拠点校の推進部である「未来探究室」のグローバル・スタディ係、事務局の国際交流コーディネーターが連携して行う。拠点校においては、すでにこれまでに3名の長期留学生の受け入れ実績があるが、連携校ではほとんどないため、今後拠点校がそのノウハウを連携校の担当者として、オンライン打ち合わせ等と通じて共有することで、DL ネットワーク全体の受け入れ数を増やしていく。

(3) テーマとして設定するグローバルな社会課題

Diversity and Inclusion を大きなテーマとする。日本が直面する大幅な人口減少問題、そしてその解決の糸口となりうる「ダイバーシティの推進」を日本そして茨城県はどのように進めていったらいいのか、という最終課題に向けて、海外体験・国内体験を通じて学びを深め、グローバル課題として解決方法を多方面から考える。

(4) 関係機関との協働による先進的なカリキュラムの研究開発・実施体制

以下のDLネットワークの協力団体等と連携しながら①、②を実践する。研究成果に応じて適宜、拠点校の取組を連携校と共有する。

①【茨城大学グローバルエンゲージメントセンター】

- a 茨城大学における「多文化共生」に関する講義の先取り履修
すでに拠点校の前期課程において実施している「多文化共生」の講義の中で、茨城大学の留学生と大学生との間で共同ワークを行う取組を、後期課程においても「未来探究」の中で発展させて行う。
- b 茨城大学における留学準備科目及び国際共修授業の先取り履修
茨城大学が提供するグローバルコミュニケーションプログラム内の留学準備に関わる科目（例 Studying Abroad, International Exchange など）及び日本人学生と留学生が共に学ぶ国際共修科目を拠点校・連携校の生徒がオンラインで受講できるようにする。

②【独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構教授（元茨城大学教授）】

「グローバル人材の資質」の育成にかかるルーブリックの策定
拠点校において令和3年度から研究している「未来探究」の資質育成のためのルーブリックに、RFCDC（Reference Framework of Competence for Democratic Culture）や拠点校で実施している Global Competence Program のルーブリックを反映させる取組をさらに継続して行い、最終的には生徒とルーブリックを共有し、グローバル人材度を可視化できるようにする。

(5) 新たな教科・科目の設定

拠点校において、グローバル人材の育成を念頭においた以下の2つの学校設定科目を設置する。

①「チャレンジ・プログラム」

後期課程4～5年次生徒が参加する通年のゼミにおいて「グローバルゼミ」を開設する（点線部分）。

	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次
総合的な学習の時間 (未来探究) 週2時間	Global Competence Program					
	地域探究		夢探究			
			グローバルゼミ			
			サイエンスゼミ			
探究的な学習の時間 (未来探究) 週1時間				夢探究		
				グループ研究	個人研究	
チャレンジプログラム (学校設定科目) 週1時間				グローバルゼミ		
				サイエンスゼミ		
				プログラミングゼミ		

a 研究の概要

- ・茨城大学グローバルエンゲージメントセンターと連携した「多文化共生」「留学前準備」「国際共修科目」に関する講義履修
- ・海外留学生とのダイバーシティに関するディスカッション
- ・生徒による高校生会議の企画・立案・運営
- ・多文化共生に関する会議への参加
- ・ダイバーシティ政策の立案

②「英語特講（仮）」

後期課程6年次において、海外大学あるいは英語で学ぶ国内大学への進学を志す生徒を対象にしたネイティブスピーカー講師による授業を設定する。

a 研究の概要

- ・株式会社アイエスエイとの簡易バカロレアプログラム（放課後）の共同実施
- ・海外大学進学に必要な Essay Writing の指導
- ・TOEFL および IELTS の指導

(7)工夫された学習活動の実施に向けた計画

前期課程より探究学習と英語教育をすべての教育活動の両輪としており、特に英語については海外留学を可能にするため「英語で学ぶ」ことに早期から慣れ、世界標準の英語力をつけることを念頭においたカリキュラムとなっている。

① Global Competence Program（株式会社アイエスエイと共同開発）

中等前期課程の「総合的な学習の時間」の30時間を使い、外国人講師によるオールイングリッシュで、21世紀型スキル・グローバルに通用する知識・マインドセットを体得させるプログラム。アカデミックスキルとして、ICT、Design Thinking や Diversity などについて学ぶ。

② TOEFL を軸とした英語教育・語学教育

ネイティブスピーカー（県ALT）を4名配置しており、英語の全授業がネイティブスピーカーとのチームティーチングとなっている。特に中等前期課程においては、週5時間ある英語の授業のうち1時間は、TOEFL Primary の準備として海外コースブックを活用した英語の授業を実施している。

③ イマージョン授業

上記①の総合的な学習の時間や、英語と美術などの教科横断型授業を英語で行ったりするなど、部分的な English Immersion を多く取り入れる。

(8)大学教育の先取り履修の計画（実施）

<令和5年度以前>

- ・前期課程において「多様性」に関する高大連携のスタート
- ・放課後体験学習「未来探究カフェ」において茨城大学の海外留学生とのワークショップを拠点校生徒向けに過去2回開催（令和3～4年度）
- ・茨城大学の「多文化共生」の講義のフィールドワークやオンラインディスカッションに、中等3年次のグローバルゼミの生徒が8時間参加し、大学生や留学生と共同グループ学習を行っている。（令和5年度）

<令和6～7年度>

- ・茨城大学との高大連携（先取り履修）にかかる協定の締結と講義履修開始
- ・「多文化共生」及び「海外留学準備」における講義の履修の検討

<令和8年度>

- ・先取り履修の成果検証（卒業生の茨城大学への入学など）

事業計画書

1. 事業拠点校名

学 校 名：茨城県立勝田中等教育学校

学校長名：下山田 芳子

2. 事業実施期間

契約締結日～令和8年3月31日

3. 構想概要

構想名

茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進（インバウンド・アウトバウンド型）

概要

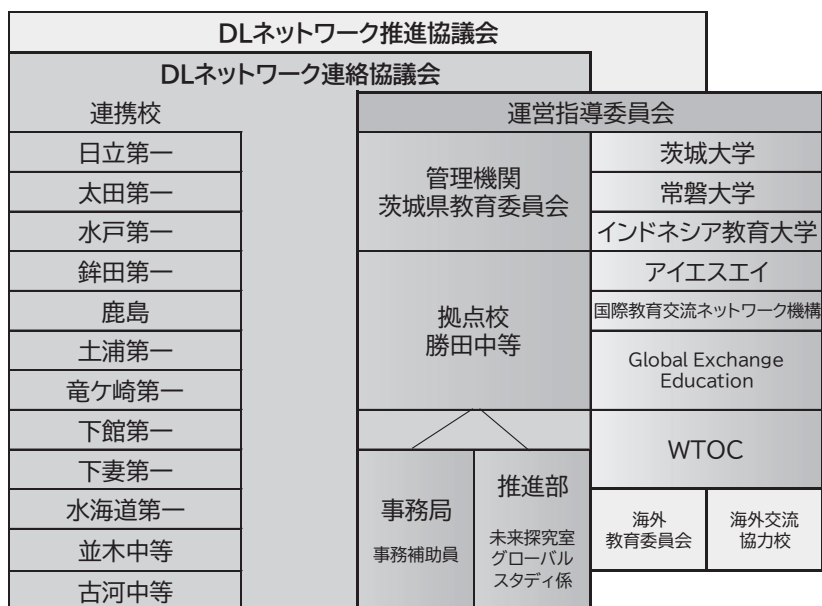
本事業では、現在の日本が直面する人口減少問題の解決の糸口となる「ダイバーシティ」を推進する教育を開発し、県内各地に点在している県立中高一貫教育校 13 校を対象に「ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材」を育成するための「ダイバーシティ学びのネットワーク（以下 DL ネットワーク）」を構築する。学校の小規模化・教育不足への対応によりダイバーシティ教育の充実が難しくなっている状況を解決する策として、学校間ネットワークを生かし、拠点校が中心となって関係大学・地方自治体・企業・海外交流協力校などを結ぶ学びのネットワークを構築し、①世界標準の英語力②オープンマインド③ダイバーシティの知識・経験④リーダーシップの4つの資質・能力の育成を図るための取組を、連携校と共有・共同実践し、開発した教育を事業後も継続できる土台作りを行うことで、未来型ダイバーシティ県を支える人材育成に資する。

4. 本事業における教育課程の特例の活用 有・無

5. 事業実施体制（体制図の添付必須）

事業項目	実施場所	事業担当責任者
海外留学派遣	拠点校・連携校	社団法人 国際教育交流ネットワーク機構東京支部 代表理事 本庄伊吹 株式会社アイエスエイ 取締役 平田敏之
海外留学生の受入れ	拠点校・連携校	Global Exchange Education 代表 大谷敦子
海外大学進学推進	拠点校・連携校	株式会社アイエスエイ 取締役 平田敏之
高大連携による先取り履修	茨城大学	茨城大学グローバルエンゲージメントセンターセンター長 池田庸子
高大連携による体験講座 （日本語教育）	常磐大学	常磐大学 国際交流語学学習センターセンター長 坂場由美子
海外大学との高大連携による体験講座	拠点校・連携校 （オンライン）	インドネシア教育大学 教授 スシ・ウイディ・アンディ
茨城県WWL高校生フォーラム	つくば国際会議場	拠点校校長 下山田芳子 茨城県教育委員会 川上一成
ダイバーシティに関する研修	つくば国際会議場	株式会社WTOC 取締役社長 堂原有美
海外大学体験研修	マレーシア・シンガポール	拠点校校長 下山田芳子 株式会社アイエスエイ 高崎支社 支店長 登坂貴
新規開設授業（グローバルゼミ）	拠点校	茨城大学 准教授 瀬尾匡輝
海外大学進学者との座談会	拠点校・連携校	柳井正財団海外奨学金事務局 田中孝俊
グローバル人材育成指標 （未来探究ルーブリック）	拠点校	独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 教授 鳥田敏行

組織体制図



6. 今年度の計画

(1) 事業項目別実施期間

実施期間：契約締結日～令和8年3月31日												
事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① DL ネットワーク連絡協議会		○										
② DL ネットワーク運営指導委員会		○									○	
③ 海外大学進学への推進	○							○				
④ 海外大学体験研修					○							
⑤ 海外大学進学者との座談会					○							
⑥ 海外留学派遣募集事務								○	○	○		
⑦ 海外留学生の受入れ	○				○	○						○
⑧ 高大連携による先取り履修				○	○	○	○	○	○			
⑨ 高大連携による体験講座								○				
⑩ 海外大学との高大連携												
⑪茨城県 WWL 高校生フォーラム		◎										
⑫ダイバーシティに関する研修							○					
⑬新規開設授業 (グローバルゼミ)			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑭STEAM 教育プログラム	DX ハイスクール事業において実施											
⑮未来探究ルーブリック作成			○			○		○			○	
⑯リーフレット・報告書作成											○	

(2)今年度の具体的な事業計画

<AL ネットワークの形成>

【①DL ネットワーク連絡協議会】(県教委主催)

- ・県内の連携校とオンラインで協議会を開催し、共同実施をする事業について確認をする。

【②DL ネットワーク運営指導委員会】(県教委主催)

- ・年に2回、事業協働機関と事業全体の運営について検討・協議を行う DL ネットワーク運営指導委員会を開催する。

<研究開発・実践>

【③海外大学進学への推進】【④海外大学体験研修】【⑤海外大学進学者との座談会】(拠点校主催)

- ・事業協働機関との連携により海外大学進学に係る説明会等を行う。
- ・8/3～8/11にマレーシア・シンガポールにおいて連携校と共同で海外大学体験研修を行う。
- ・夏休み中に柳井正財団と協働で、海外大学進学者との座談会を拠点校と連携校にて行う。

【⑥海外留学者の派遣(アウトバウンド)】(拠点校・連携校)

- ・拠点校における海外留学推進のノウハウを連携校と共有することで、茨城県全体の海外留学派遣数を増加させる。

【⑦海外留学生の受入れ(インバウンド)】(拠点校・連携校)

- ・拠点校における海外留学生の受入れのノウハウを連携校と共有することで、茨城県全体の海外留学生の受入れ数を増加させる。

【⑧高大連携による先取り履修(茨城大学)】(県教委主催)

- ・県と茨城大学が高校生の先取り履修に係る協定を結び、7～12月において拠点校・連携校の生徒の希望者を対象に多文化共生に係る授業「国際共修」を先取り履修できるようにする。

【⑨高大連携による体験講座】(常磐大学主催)

- ・在住外国人を対象とした日本語教育の授業を、常磐大学の学生とともに拠点校・連携校の生徒が体験できる講座を常磐大学が主催して実施する。

【⑩海外大学との高大連携による体験講座】(拠点校)

- ・インドネシアのインドネシア教育大学の日本語を専攻する生徒とのオンライン交流授業を行う予定。

【⑪茨城県 WWL 高校生フォーラム】【⑫ダイバーシティに関する研修】(県教委主催)

- ・昨年度は拠点校のみで開催したフォーラムを、今回は12校の連携校も入れた形で行う。
- ・午前中に「⑫ダイバーシティに関する研修」を実施することで、フォーラムが単なる発表会に終わらないよう工夫する。
- ・ダイバーシティに関する研修/多文化共生に関する講演/ポスターセッション/パネルディスカッション(パネラーは拠点校・連携校の海外留学経験者や海外からの留学生)

【⑬新規開設授業(グローバルゼミ)】(拠点校)

- ・中等4年次生が中心となって、3年次生で学んだグローバルゼミの体験を生かし、様々な探究を行う。
- ・令和6年度にゼミ全体で行った「防災運動会」の取組が県のコンテストで金賞をとり、賞金も出たことから今後もゼミの取組としてブラッシュアップして継続する。

【⑭STEAM 教育プログラム】(拠点校・連携校)→DX ハイスクール事業として実施

- ・マサチューセッツ工科大学(MIT)の教授による文理融合の教育プログラムを導入し、夏に1日体験講座を行う。成功すれば今後カリキュラムにも導入することを検討する。

【⑮未来探究ルーブリック作成】(拠点校)

- ・継続的に資質育成指標における生徒の自己評価をデータとして収集する。
- ・職員研修を通して、全教科で資質育成に取り組めるようなカリキュラムマネジメントを考案し、学校のインフラとなるシステムを作る。

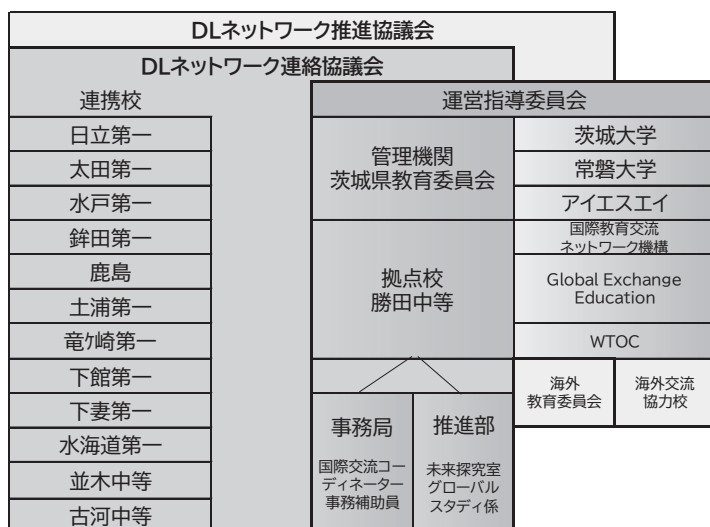
【⑯リーフレット・報告書作成】(拠点校)

<財政等支援>

拠点校である勝田中等教育学校には、事務補助員1名と英語教員1名を配置する。

第2章 管理機関の取組

2-1 DL ネットワークの構築



1 DL(ダイバーシティラーニング)ネットワークについて

- (1) 事業拠点校
茨城県立勝田中等教育学校
- (2) 県内事業連携校
茨城県立日立第一高等学校・太田第一高等学校・水戸第一高等学校・鉾田第一高等学校・鹿島高等学校・土浦第一高等学校・竜ヶ崎第一高等学校・下館第一高等学校・下妻第一高等学校・水海道第一高等学校・並木中等教育学校・古河中等教育学校 計12校
- (3) 事業協働機関
茨城大学・常磐大学・株式会社アイエスエイ・社団法人国際教育交流ネットワーク機構・株式会社WTOC・Global Exchange Education

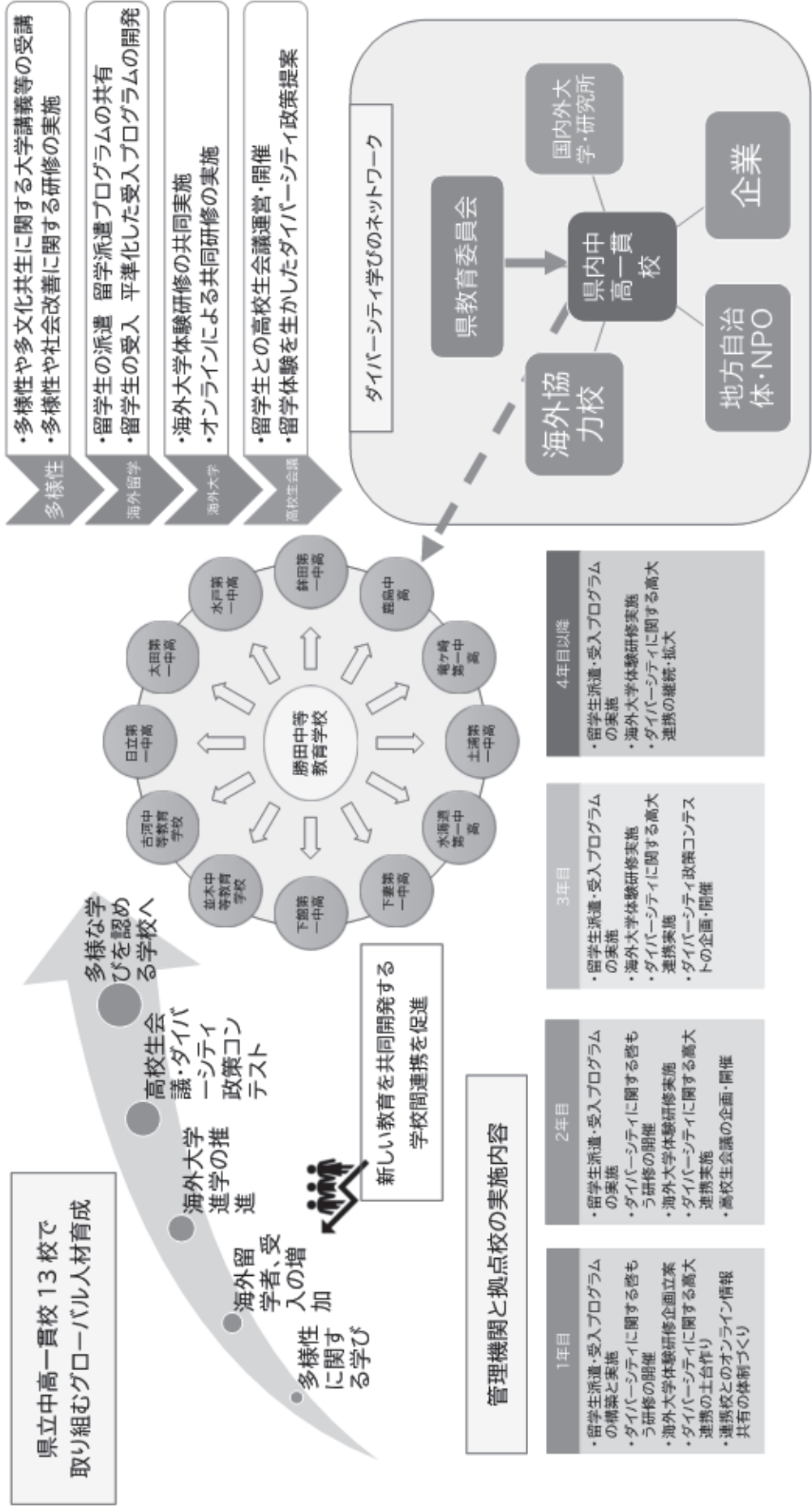
2 管理機関主催会議

- (1) 令和7年度茨城県DLネットワーク連絡協議会(オンライン開催)
期日：令和7年4月25日(金)
参加者：拠点校及び県内連携校12校と事業協働機関、県教育委員会
内容：令和7年度茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業の実施計画の説明
内容：令和6年度茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業の実施計画について
- (2) 茨城県DLネットワーク運営指導委員会(対面：ひたちなか市勝田一中地区コミュニティセンター)
期日：令和8年2月17日(火)
参加者：拠点校、事業協働機関、県教育委員会
内容：令和7年度実施内容と2年間の取組の振り返り、事業終了後の取組の継続についてのディスカッション

3 管理機関主催イベント

- (1) 茨城県WWL高校生フォーラム
期日：令和7年10月13日(祝月)つくば国際会議場
参加者：拠点校及び連携校、それ以外の県立高校の生徒と保護者、連携校教員、地域関係者
内容：ダイバーシティ研修、講師による講演、ポスターセッション、パネルディスカッション
- (2) 茨城大学の先取り履修
期日：令和7年6月～9月、9月～12月
内容：国際共修(ベトナム)2単位、国際共修(ミネソタ)1単位 どちらもオンラインで実施
参加者：拠点校・連携校生徒 12名

茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育を推進する学びのネットワーク



2-2 茨城県 WWL 高校生フォーラム

1. 本プロジェクトの目的

現在の日本が直面する人口減少問題の解決の糸口となりうる「ダイバーシティ」を推進する教育の開発を通して、ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材を育成するため、研究者や起業家、海外の留学生との知的交流の場や生徒の研究成果の発表の場とする。

2. 開催日 令和7年10月13日(月祝)

3. 会場 つくば国際会議場 大会議室 101、102

4. 主催 茨城県教育委員会

5. テーマ 「茨城県をダイバーシティ先進県にするためには」

6. 参加者

■生徒：62名(WWL 拠点校及び連携校 61名：勝田 42名、下妻 12名、鹿島 4名、並木 3名/それ以外の生徒 1名：牛久栄進高校 1名)

■教員：6名程度(WWL 拠点校及び連携校、WWL 連携校以外の教員)

■保護者：13名程度(WWL 連携校)

■在日外国人：12名(茨城県庁 2名、茨城県国際交流協会 6名、筑波大学 4名)

■基調講演講師：国際基督教大学 准教授 橋本 直子氏

■運営指導委員：

- ・茨城大学 副学長 池田 庸子、准教授 瀬尾 匡輝
- ・常磐大学 大友 由梨香
- ・株式会社アイエスエイ 平田 敏之、登坂 貴
- ・茨城県立勝田中等教育学校 学校長 下山田 芳子、教職員
- ・茨城県教育委員会

7. プログラム内容

9:00 開場

(開会挨拶) 塚田 歩 副参事(茨城県教育委員会)、学校長 下山田 芳子(勝田中等教育学校)

9:30 ダイバーシティ研修「多文化共生の課題と共生のためのコミュニケーション」

12:00 昼食

12:55 ポスターセッション

13:50 休憩

14:00 基調講演 国際基督教大学 准教授 橋本直子氏

14:50 休憩

15:00 拠点校生徒による発表

15:20 パネルディスカッション「多文化共生社会実現のために私たちができること」

15:50 閉会

8. 内容

【ダイバーシティ研修】

テーマ「多文化共生の課題と共生のためのコミュニケーション」

■実施方法：生徒が 13 グループに分かれ、それぞれのグループに茨城県に住む外国人も加わり、お互いに多文化間で困ることの解決のためにできることを話し合い、最後にプレゼンテーションを行った。

■内容：

○グループワーク 1-1. 外国人がいて困ること、困ったことは？(日本の生徒のみ)

○グループワーク 1-2. 1-1 で出たことはなぜ困るか、戸惑ったときのリアクションを考えよう

○グループワーク 1-3. 上記を外国人に伝えて、意見を聞いてみよう

○グループワーク 2. 外国人に日本で困ったことを聞いてみよう

○グループワーク 3. お互いの困ったことを解決するためにできるアイデアを考えよう

○英語でプレゼンテーション

【ポスターセッション】

■参加チーム：10 チーム 31 名

(勝田中等教育学校 5 チーム 12 名、下妻第一高等学校 3 チーム 12 名、鹿島高等学校 1 チーム 4 名、並木中等教育学校 1 チーム 3 名)

■チーム別テーマ：

勝田①：みんなで作る学校生活～チューター制度で広がる留学生との絆～

勝田②：防災と多文化共生を学ぶ～運動会でつながる力～

勝田③：STOP!! 「ポストハーベスト・ロス」～次世代に繋

げるために～

勝田④：災害時のやさしい日本語

勝田⑤：誰もが安心な食事を～食の安心ロゴマーク～

下妻①：持続可能な食を通して茨城を楽しもう

下妻②：「つくもつと」社会をより元気にする場

下妻③：笠間焼×多様性

鹿島：異文化立食パーティー ～お互いを理解するために～

並木：多様性への一歩！地域力×温暖化対策

■ポスターセッション入賞者

○総合の部 最優秀賞：勝田中等教育学校①

「みんなで作る学校生活～チューター制度で広がる留学生との絆～」

○研究発表の部 優秀賞：勝田中等教育学校③

「STOP!! 「ポストハーベスト・ロス」～次世代に繋げるために～」

○発表の部 優秀賞：下妻一「笠間焼×多様性」

※審査員：(日本) 茨城県教育委員会 2名

(海外) 茨城県庁 1名、筑波大学 2名

【基調講演】

国際基督教大学 准教授 橋本 直子 氏

テーマ：「世界における移民政策：日本がめざす共生社会への示唆」

【拠点校生徒による発表】

●留学について：勝田中等 5年次 3名

●海外研修について：勝田中等 5年次 4名

【パネルディスカッション】

「多文化共生社会実現のために私たちができること」

進行：アンソニー (ALT)

パネラー：(日本生徒) 勝田 1名、下妻 1名、並木 1名

(外国人) 茨城県庁 2名、勝田留学生 1名

(講評) 国際基督教大学 准教授 橋本 直子 氏

茨城大学 准教授 瀬尾 匡輝 氏

(閉会・全体講評) 茨城大学 副学長 池田 庸子 氏

9. アンケート結果 (回答者数 25名) 抜粋

- ・自分の成果を伝える場として、普段は会わない人との意見交流の場として、そして国際系への興味をより深める場として最高のイベントでした。ありがとうございました

した。

- ・外国人の人と趣味で意気投合出来たり、新しい繋がりが作れて嬉しかった。
- ・今回の高校生フォーラムはとても英語がハイレベルであったためとても英語力向上のモチベーションになった。とても貴重な経験になった。
- ・もう少し英語を流暢に話せるようにスピーキングに力を入れていきたいと思った。勉強のやる気が上がらないときにこの イベントを思い出して頑張っていきたいと思った。
- ・今までダイバーシティや国際という外に目を向けがらだったが、ローカルに一旦戻して地域の外国人と関わるなどする中で理解を深めていきたい。
- ・素晴らしい企画であると感じた。参加者だけでなくオーディエンスとしてでも多くの中高生、先生方に見て感じて欲しいと思った。



2-3 高大連携による茨城大学先取り履修

茨城県教育委員会

1 事業の目的・背景

本事業は、高校生が大学の講義を実際に履修する機会を通じて、学問分野に対する関心を高めるとともに、自国文化や異文化への理解を深め、多様な価値観をもつ他者と協働しながら学ぶ力を育成することを目的として実施した。

近年、高校教育においては、探究的な学びや対話的な活動を通じて、社会や世界と主体的に関わる力の育成が重視されている。本事業は、こうした教育的要請を踏まえ、高校生が国内外の大学生と共に学ぶ学習環境を設定することで、多文化的な視点から物事を捉える経験を充実させ、自らの文化を相対化しながら理解を深める機会を提供することをねらいとした取組である。

2 事業の概要

高校生は、茨城大学で開講されたオンライン講義「国際共修（ベトナム）」「国際共修（ミネソタ）」に参加し、大学生および海外協定校の学生とオンライン及び一部対面で協働的に学習を行った。講義では、国際的な教育手法である COIL（Collaborative Online International Learning）を取り入れ、「文化」をテーマに調査、対話、発表等の活動に取り組んだ。

3 実施状況と参加の様子

参加した高校生からは、当初、初対面での緊張や年齢差を気にする声が聞かれた。しかし、大学生が積極的に声をかけたり、意見を引き出したりする中で、次第に発言や質問が増えていった。最終レポートでは、「最初は発言するのが怖かったが、回を重ねるうちに自分の意見を言えるようになった」「質問をすると話が広がり、話し合いが楽しくなった」といった声が見られ、高校生が安心して参加できる学習環境が形成されていたことがうかがえる。

4 成果および教育的効果

（1）高校生の学び

高校生は、言語や文化の違いに直面しながらも、英語を共通言語として用いたり、ジェスチャーやチャット機能を活用したりするなど、工夫しながらコミュニケーションを図っていた。参加者からは、「日本文化を説明しようとして、当たり前のことを説明できない自分に気づいた」「母国語で話してもらえると嬉しいと知り、外国語を学びたい気持ちが強くなった」といった感想があり、異文化理解とともに、自国文化への気づきや学習意欲の向上が見られた。

また、大学生との交流を通じて、「大学生の発表の仕方に感動した」「進路の話がとても参考になった」など、大学での学びや将来像を具体的に思い描くきっかけとなった。

（2）大学生の学び

大学生からは、「高校生が不安を感じないように、雰囲気づくりを意識した」「年齢差を越えて対等に話すことの大切さを学んだ」といった声が聞かれた。高校生と共に学ぶ経験は、大学生自身にとっても、リーダーシップやコミュニケーション力を振り返る機会となっていた。

5 高大接続の観点からの意義

本事業により、高校生は大学の授業に参加し、大学で求められる学び方を体験することができた。また、大学生にとっても、高校生と共に学ぶ中で、自身の学びを見つめ直す機会となった。「教える側・教えられる側」という関係にとどまらず、「共に学ぶ」関係が生まれた点は、本事業の大きな成果であり、高大接続の有効なモデルの一つといえる。

6 運営面での成果と課題

オンラインを中心とした実施により、国や地域を越えた交流が可能となり、学びの幅が広がった。一方で、連絡手段や情報共有の面で改善の余地があることも明らかになった。

7 関係機関への謝辞

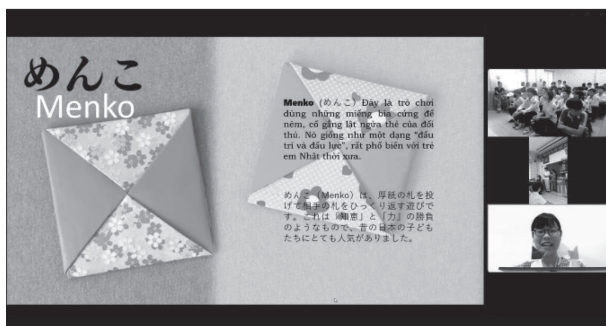
本事業の実施にあたっては、茨城大学の多大なる御理解と御協力を賜り、深く感謝申し上げます。特に、講義を担当された瀬尾匡輝准教授には、講義設計や高校生への丁寧な配慮、海外大学との調整等において多方面にわたる御尽力をいただいた。また、大学生においても、高校生と共に学ぶ姿勢を大切にしながら、年齢差や立場を越えた対話と協働を実践していただいた。本事業が高大接続の有意義な取組として成果を上げることができたのは、こうした大学側の積極的な参画と教育的視点に支えられた結果であり、改めて感謝の意を表したい。



国際共修（ミネソタ）
ウィスコンシン大学スペリオール校との交流



国際共修（ミネソタ）
ミシガン州立大学との交流



国際共修（ベトナム）
ベトナム・ハイフォンの MARIE CURIE 高校の生徒に対して、日本の遊びについてオンラインで紹介する高校生



国際共修（ベトナム）
中高生を対象にしたイベントの様子

第3章 拠点校の研究開発の内容・活動実績

3.1 海外留学

・海外派遣

今年度、拠点校からは4名の生徒が海外派遣プログラムに参加している。

	氏名	留学先	期間
1	前田 ゆうな	カナダ ブリティッシュコロンビア州	1年間
2	田浦 由樹	カナダ マニトバ州	1年間
3	武富 翔	カナダ ノバスコシア州	1年間
4	斉藤 愛香	カナダ ブリティッシュコロンビア州	1年間

・海外留学生受入

今年度、拠点校および連携校において留学生の受け入れを実施した。

拠点校では6名（オランダ1名・イタリア1名・フィンランド1名・オーストラリア1名・アメリカ2名）、連携校である県立下妻第一高等学校では1名（フィンランド）の留学生を受け入れた。

留学生は聴講生として受け入れられ、日本人の生徒と同じ様にクラスに配置され、実際に授業へ参加しながら日本での学校生活を送っている。日常的にクラス内で国際交流が行われていることに加え、校内で実施される国際交流イベントにも留学生が参加することで、クラスメイトに限らず他学年の生徒とも交流する機会が生まれている。

	学年	氏名	出身国	期間
1	5	Yuki Fujio	オランダ	10 カ月 (2024.9~2025.7)
2	5	Mysi Kuula	フィンランド	3 カ月 (2025.4~2025.6)
3	4	Emma Mininni	イタリア	3 カ月 (2025.4~2025.6)
4	4	Benito Castillo	アメリカ	3 カ月 (2025.9~2025.11)
5	5	Dayannara Diaz	アメリカ	3 カ月 (2025.9~2025.11)
6	4	Scarlett Holland	オーストラリア	5 カ月 (2025.9~2026.1)
7	1	Roosa Pietilainen	フィンランド	5 カ月 (2025.9~2026.1)

拠点校では、生徒主体による「留学生チューター制度」が立ち上げられ、生徒自らが中心となって運営を行っている。本制度は生徒の発案により開始され、校内で協力生徒を募った結果、現在約30名がチューターメンバーとして活動している。

チューター生徒は、来日した留学生に対し、学校生活における細かなルールや日々のスケジュールの説明など、実生活に密着したサポートを行っている。



校内での国際交流を活性化させるため、生徒主体で国際イベントを企画し、放課後に留学生を招待する取り組みも実施している。これらのイベントにより、留学生が所属するクラス以外の多学年の生徒との交流機会が創出されている。特に、「留学生と交流したいが、自クラスに留学生がいないため関わる機会がない」という生徒の課題解決にもつながっており、学年を超えた国際交流の促進に大きく寄与している。なお、本チューター制度の詳細については、本報告書第3章「全国高校生フォーラム」の項に概要を掲載している。

校内での国際交流を活性化させるため、生徒主体で国際イベントを企画し、放課後に留学生を招待する取り組みも実施している。これらのイベントにより、留学生が所属するクラス以外の多学年の生徒との交流機会が創出されている。特に、「留学生と交流したいが、自クラスに留学生がいないため関わる機会がない」という生徒の課題解決にもつながっており、学年を超えた国際交流の





2025年12月

カナダ留学レポート

齋藤愛香



学習状況

冬休みに入る前だったので、いくつかの教科でテストや最終的なプレゼンテーションなどがありました。成績も出ましたが、あまり納得できない結果の教科もありました。次の学期では、さらに頑張ろうと思います。

生活状況

ホームステイ

まだまだ思うように話せず、ホストファミリーとの仲もあまり深めることができていないと感じます。それでも、ホストマザーが気にかけてくれるので嬉しです。私も間違いを恐れず、話していく必要があるととても感じています。

放課後・休日

今月はクリスマスがあったので、クリスマスらしいことをたくさんしました。

ホストマザーがアドベントカレンダーというものをくれました。これは中にチョコレットが入っていて、クリスマスまで毎日一つずつ空けていくものです。カナダではクリスマスの定番だそうです。ホストファミリーの犬用のアドベントカレンダーもありました。



バンクーバーに行きました。街中にクリスマスの飾りがたくさんあって、とても綺麗でした。

ジンジャーブレッドトレートというジンジャーブレッドでできたお家がたくさん並んで展示されている場所に行きました。本当にお菓子だけでできているのか疑うほどすごかったです。

クリスマスマーケットにも行きました。たくさんクリスマスの飾りや食べ物などが売っていて、雰囲気もよくとても楽しかったです。



学校の留学生向けの授業でもジンジャーブレッドハウスを作りました。初めてで楽しかったです。

他にも学校では放課後にクリスマスパーティーがありました。お友達とサントナさんと写真も撮りました。

クリスマスには、ホストファミリーの親戚も集まってクリスマスディナーを食べました。クリスマスの日には、みんなで朝ごはんを食べながらプレゼントを貰いました。壁に吊るしてあった大きな靴下にプレゼントが入っていました。

留学に来てからもう4ヶ月が経ってしまい、残りはあと6ヶ月です。そして、2025年ももう終わってしまいます。時間の流れがとても早いことにびっくりしています。この機会に今年を振り返って、2026年はさらに良い年にしていきたいです。



10月留学レポート

勝田中等教育学校 4年B組 田浦由樹

生活

休日は友達と遊びに行くことが増えました。最近はコメントやメッセージやショッピングモールに行ったり、友達の家でプーチンやお菓子作りをしました。学校でも先生の話が少しわかるようになってきて、1人で作業できることが増えてきました。生徒の会話も少しだけわかるようになり、楽しいです。まだ留学生の仲のいい友達ができなくて留学生のイベントが大変です。イベントなどに出席して友達を作りたいです。カナダはもう気温がマイナスになっていて、車の窓ガラスや芝生、水溜まりが凍っています。初めの頃はバスの乗り方がわからなくて間違ったバスに乗ってしまい、ダウンタウンで迷って最終的にホストファミリーが迎えにきてくれたこともありましたが、今ではバスにも迷わずに乗れるようになり、バスの乗り換えもできるようになって、行動範囲も広がりました。カナダにきてから今のところ、ホームシックやカルチャーショックを感じることはありません。新しい環境にもおむね順応していて、日常生活を安定して送ることができています。



学習

テストも多くなってきてきましたが、頑張っています。最初の頃はホストファミリーに手伝ってもらっていたこともありましたが、今では1人でできるようになり、宿題も前回より時間がかからなくなりました。また、友達もわからないことがあったらいつでも聞いてねなどとやさしい言葉をかけてくれるので心強いです。先生の話も少しわかるようになって嬉しです。家庭科では自力でブラウニーを作ることができました。地理の授業でももてだいたいのようなたくさんあって大変に感じるときもおおくあります。また、学校のアプリの使い方もわかるようになりました。



カナダ留学レポート

-October-

4年B組 前田ゆうな

○はじめに

カナダでの留学生活が始まって、二ヶ月が経ちました。段々と気温が低くなり、朝や夜は日本の12月のような寒さで、体調に気をつけながら生活しています。今回のレポートでは、二ヶ月の間で成長したと感ずることや達成できた目標について紹介します。

○カナダでの友達作り

私の学校は、留学生をたくさん受け入れており、その中でもドイツやイタリア、中国出身の生徒が多くいます。日本人は20人程度で、割合としては多くありません。しかし、同じ日本人留学生でも、語学ではなくコミュニケーションや卒業、学校のカリキュラムの一環など、様々な目的を持った留学生がいます。母国語ばかり話す他の留学生や自分よりも友達作りが上手くいる日本人留学生を見て、大きな不安や焦りがありました。が、クラブ活動やきかけに現地の友達が多くでき、お昼を一緒に食べています。最近では、放課後や休日に友達と買い物に行ったり、遊園地に行ったりしました。とても嬉しく感じています。

○英語力の伸びと現地での学習

リスニングとリーディングの力がとても上達したと実感しています。初めの頃よりも授業や友達の話を理解することができるようになりました。特に社会の授業では知らなかった単語を多く覚えめました。最近では英語字幕付きの海外YouTuberの動画を通常速度で見られるようになりまりました。今は動画の中でよく使われる表現や文法を学びながら、字幕なしで見られるように挑戦しています。また、学校にあるデスクノートの漫画を読んでいると英語を読む速度が上がったように感じます。クラスマスマス前までに全部読むつもりです。

○達成したこと

私は、美術・バドミントン・多文化クラブ・Global Connection Clubの4つのクラブに入りました。特に、今月の多文化クラブではインドデパートを開催し、Diwali paintingやダンスを踊りました。当日の放課後は部員全員でピザパーティをしてとても盛り上がりました。

○まとめ

さまざまな出来事があったという間の10月でしたが、貴重な経験ができて良かったです。11月もボランティアやフィールド学習などたくさんイベントがあります。毎日を有意義に過ごせるよう頑張りたいです。



nova scotia 11月編 武富 翔

Hi! お久しぶりです。早くも3ヶ月が経過しました。

最近の英語はスピーキングに本当に苦戦しています。リスニングはなんとなく聞き取れるようにはなりましたが、思っていることを自分の知っている単語、文法で即座に答えなくちゃいけないので本当に難しいです。

初雪を観測して、11月末の今は少し雪が積もっています。また、今月はジムを契約して、週2回通っています。

ホストファミリー

お互いの生活に慣れ始めてきました。それによって、多少の礼儀も無くなってきています。そのため、私は最近気になるところが増えてきました。そのことをホームステイコーディネーターに送ったところ、翌日家に来て、マザーに話をしてくれ流ということがありました。

学校生活



一方、学校生活は徐々に楽しくなってきました。今月初めて成績表が出され、日頃熱心に授業を受けていたので、それが形外となり、嬉しかったです。また、毎日予想外のことが起こっているのも退屈しないです。



ところで今月、1番海外らしさを感じた出来事があります。それが生徒同士の喧嘩です。私の英語の授業中に起こりました。1対1の喧嘩だったのに、急に第三者が入ってきて2対1になってました。3人も話したことがある人だったので、悲しかったです。喧嘩は日常的に起こっているのですが、本当に関わらないようにしていきたいです。

3.2 高大連携

3.2.1 海外大学視察

海外大学体験研修（マレーシア・シンガポール）

1. 研修日程：令和7年8月3日（日）～8月11日（月）9日間
2. 参加者：茨城県立勝田中等教育学校7人、栃木県立宇都宮東高等学校2人、群馬県立前橋高等学校2人、群馬県立高崎女子高等学校5人、計16人（男子6人、女子10人、高校2年生8人、1年生8人）、引率教員1名、添乗員1名

3. 研修内容

(1)大学研修

マレーシアの大学見学

プトラ大学（UPM）（国立）、テイラーズ大学（私立）、サンウェイ大学（私立）の3大学で研修を行った。プトラ大学では学生さんと一緒に日本とマレーシアを比較するプレゼンを行った。中国系、マレー系、インド系と多様な学生さんとの交流により、ダイバーシティ社会を実感できた。大学のあたたかい受け入れ態勢が素晴らしく、研修の内容も難しすぎず、研修の良いスタートが切れた。テイラーズ大学では、ホスピタリティ学部の体験授業ではホテルのベッドメイキングや受付業務の経験をした。日本人の学生さんが、なぜテイラーズを選んだのかなどを話してくれた。サンウェイ大学ではファッション系学部の授業を見学。日本では専門学校で学ぶようなことを大学で「実技+理論」で学んで学位を取るのがマレーシアの大学教育の魅力。どの大学でも、生徒から質問も多く出た。



シンガポールの大学

2日間に渡って、シンガポール国立大学（NUS）（国立）とシンガポール経営大学（SMU）（国立）でTGC(The Global Classroom)という研修に参加した。学生がグループリーダーとなってグループでの活動をサポートしてくれる。リーダーシップなどについて学び、最後には生徒がそれぞれ「将来の夢」「研修で学んだこと」についてスピーチを行った。NUSでは、かつてNUSで教鞭をとり、現在は竹中工務店に戻られている小椎尾（こじお）先生のレクチャーをきいた。



(2) その他の研修

・ NUS の学生と一緒にシンガポールアラブストリートでのインタビュー活動をおこなったり、起業家の方や日本人学生によるレクチャーを聞いたりと盛りだくさんな研修内容だった。

・ 観光では、マレーシアではバトゥ洞窟（ヒンドゥ教聖地）、ブルーモスク（イスラム教寺院）、中国の寺院、王宮、ロイヤルセランゴール企業見学などを訪れ、シンガポールではチャイナタウン、アラブストリート、リバークルーズ、マーライオン、ガーデンバイザベイなどを訪れた。



4 生徒感想（他校生の感想も含む）

【勝田中等教育学校5年次 今立明花】

私がこの研修に参加したきっかけは、マレーシアの大学に興味があり、調べるだけでは分からない現地の雰囲気や学びの環境を、自分の目で確かめたいと思ったからです。研修を通して特に学んだことは、多文化共生の大切さです。マレーシアやシンガポールでは、国籍・宗教・言語の異なる人々が同じ空間で自然に生活し、会話をしている様子を見ることができました。その姿から、互いの違いを認め合うことで社会が成り立っているのだと実感しました。また、大学で行われたプログラムはすべて英語で行われ、難しさを感じることもたくさんありましたが、拙い英語でも自分から発言することで積極性を身につけることができました。この研修には、群馬や栃木の学校の生徒も参加していました。最初は緊張から同じ学校同士で行動することが多かったのですが、グループワークを通して協力する中で自然と仲が深まり、お互いに刺激を与え合える関係を築くことができました。研修を通して、異なる価値観を受け止める力や、自分の意見を伝えようとする姿勢が身についたと感じています。この経験を、今後の学校生活など身近なところから生かしていきたいなと思います。

【その他生徒感想】

- ・ 色々な国の人から自分の人生や夢について考えを聞いて良い刺激になった。
- ・ 国内に捉われず、海外での進学や就職、スタートアップなどの幅広い進路があることに気付いた。
- ・ 海外の大学の制度や生活方法を知れたことで自分の視野が広がった。講義やグループワークを通じて様々な考え方を学べた。
- ・ 海外大学を何となく視野に入れていたけど全然知らないところが多かったので、実際に現地に行って学生などの雰囲気も知れて良かった。また、色々な人と話す機会があって最初は不安だったけど、不安を忘れるくらい優しく分かりやすい英語で話してくれて会話をする楽しさを実感できた。知らない人でもチームワークができることも知れて楽しかった。

3.2.2 国内大学視察

国際教養大学 視察

令和7年6月13日(金) 吉富 忠宏

・国際教養大学(秋田県秋田市)は2004年に開学した、「すべて英語の教育」「全員留学」が特徴の公立大学である。「グローバルリーダー」の育成を目指している。

【教育の充実】

- ・THE 日本大学ランキング(2023)で総合15位、教育充実度2位。
- ・学部生790人と規模の小さい大学。学生と専任教員数の比13:1。学生数が20人未満の授業73.0%
- ・就職決定率100%。有名企業に続々と就職している。有名企業が大学に来て説明会を開いたり、その場で採用をしたりしている。海外の大学院に進学する学生も多い。

【グローバル教育】

- ・英語による教育100%、留学生の割合4人に1人、外国人教員の割合56.5%、海外の提携大学数(交換留学)52か国、206大学。
- ・大学1年目は、英語で学ぶための英語力をつける「英語集中プログラム」を受ける。全員が寮生活を送り、多様な異文化と出会い共生する。
- ・リベラルアーツ教育であり、入学時に専門を決める必要はない。専門領域としては、「グローバル・ビジネス領域」「グローバル・スタディーズ領域」「グローバル・コネクティビティ領域」

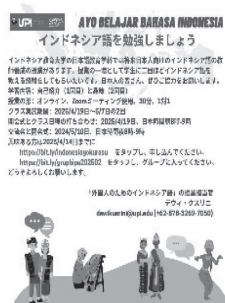
【入試制度】

- ・多様な能力や資質を備えた学生獲得のために、個性的な入試を数多く実施。
- ・「ギャップイヤー入試」「グローバル・ワークショップ入試」導入。
- ・一般選抜試験もA~C日程で、入学時期も4月と9月。

3.2.3 茨城大学・常磐大学との連携プロジェクト

◆茨城大学×茨城県 WWL×インドネシア教育大学「オンライン交流 インドネシア語を勉強しましょう」

令和7年4月19日～5月7日に茨城大学×茨城県 WWL によるオンライン公開プロジェクト「インドネシア語を勉強しましょう」が行われ、茨城大学生とともに、拠点校からも4名の生徒が参加しました。本プロジェクトは、インドネシア教育大学の日本語教育学科のテリ教授と茨城大学の池田教授と本校が連携して企画・運営を行いました。これはインドネシア教育大学で日本語教育を学ぶ学生と茨大生、勝田中等生がペアになり、お互いの母国語で交流をすることで言語を学びあう、という企画です。学生と生徒は、お互いにオンライン上で自己紹介をし、お互いの趣味や自国の紹介などをしました。生徒は、異文化交流だけでなく、英語以外の言語を学ぶことにも積極的に挑戦していました。



生の方から、日本語支援をどのように行っているかというプレゼンがありました。

その後、グループごとに分かれ、それぞれに考案した日本語を学ぶためのゲームを、この日のた

めに訪れてくれた外国人児童生徒と一緒に楽しみました。最初は本校生も戸惑っていましたが、積極的に子どもに話しかけ、ゲームを盛り上げようとする常磐大学生たちの配慮のおかげで、だんだんとプロジェクトの一員としてゲームに参加できるようになってきました。水戸市の日本語教室から来てくれた国籍も年齢も多様な外国にルーツを持つ子どもたちと関わることで、これからの学校教員にはこのような日本語支援を必要とする児童生徒への指導の知識や経験が必要になる、ということがわかりました。

以下は生徒の感想です。

◆この活動を通して、日本語が不自由な子どもにも様々なタイプがあることや、母国語と日本語を同時に学ぶことでどちらも伸ばすことができるなど、初めて知った大切な学びがありました。大学生の方々との交流では、人との接し方を自然に学ぶことができました。この経験は、将来や進路で悩んでいた自分に大きなヒントをくれました。この講座に参加することができて本当に良かったです。

◆外国にルーツをもつ子供たちで、なぜ日本語が話せない子供たちがいるのか理解することができました。今回、これまで自分がボランティアで関わってきたひたちなか市の日本語教室での経験が役に立ちました。あつと言う間の3時間でした。今私は「やさしい日本語」について調べています。

◆このイベントに参加できて本当に良かったです。年々増加している日本語の支援を必要とする外国にルーツをもつ子供たちの課題などを学んだあと、実際に外国籍の子供たちと日本語のゲームを通して一緒に楽しむことができるとも貴重な経験になりました。自分には、外国にルーツをもつ友人がいるので、今回の講座を親身になって聞くことができました。彼らは、母国語と日本語という言葉の違い、さらには文化の違いを、小さい頃から受け入れなければならず、とても大変だと思います。今回の活動を通して、言語を学ぶ側ではなく、言葉を教える側の難しさに気づきました。

◆日本語指導が必要な外国人にも色々な背景をもつ人がいることを学んだ。大学生との交流を通して、外国人も楽しめるゲーム作りも学ぶことができた。ふだんボランティアを行っているひたちなか市の日本語教室に通ってくる外国人とは違った年齢層の人と交流できて楽しかった。

◆日本国籍をもっていない日本語学習の支援が必要な外国人が1万人以上もいる現実に驚きました。

◆茨城県 WWL×常磐大学 「(外国にルーツを持つ子どもへの)日本語支援体験講座」

令和7年11月13日(木)の県民の日に、常磐大学×茨城県 WWL による公開講座「日本語支援体験講座」が常磐大学で開かれました。この講座は、茨城県 WWL のコンソーシアムメンバーである常磐大学人間科学部の飯野令子教授と石崎友規准教授が、茨城県 WWL の拠点校である本校と連携校のために企画してくださいました。本校からは日本語教育や外国人支援に関心のある5名の生徒が参加しました。この講座は、教員免許を取得するための勉強をしている常磐大学の学生と一緒にを行いました。



最初に、飯野教授から、外国にルーツをもつ子どもたちが、家族間であっても同じ言語で意思疎通が図れないなどの複雑な言語環境に置かれており、日本語の学習の支援を必要としていることなどについて、講義をしていただきました。

その後、石崎准教授による、常磐大学の教職課程の学生たちの授業にお邪魔し、外国人児童生徒と一緒にゲームを楽しみながら日本語を学ぶ、というプロジェクトに参加しました。

最初に、笠間市の日本語支援団体でボランティアとして外国人児童の日本語教育に関わっている学

3.3 グローバルゼミ

3.3.1 未来探究グローバルゼミ（英語ゼミ） 4, 5年次

学校設定科目である後期グローバルゼミ（英語ゼミ）では、今年度43人の生徒が活動しました。本年度は主に、11月末に開催した「防災運動会」の実施に向けた企画、準備と生徒個人の研究活動を行ってきました。

生徒の発案・企画で始まった防災運動会は昨年に引き続き2度目の開催です。運動会形式で防災を楽しく学ぶイベントで、ここに多文化交流の要素を取り入れ、国籍を超えたコミュニケーションの場とすることで、地域の多文化共生コミュニティの形成を目指しています。言語の壁や情報の不足により災害弱者となりやすい外国人と、同じ地域に住む日本人がともに防災について学ぶことに意義があると考えて行っています。茨城大学の未来共創学環の瀬尾匡輝准教授のアドバイスをいただきながら進めており、茨城大学の学生さんにも準備に加わっていただいています。また、ひたちなか市国際交流協会にほんご教室ルンルンから外国人の方もご協力くださっています。今年度は新たに、茨城工業高等専門学校さんにもご協力いただきました。英語ゼミ生徒では思いつかなかったテクノロジーの知識を高専の学生さんが補ってください、新たな競技が生まれました。

防災運動会は、2年連続で「防災グローバルリーダーズ（中5生徒4人）」がIBARAKIドリームパスの戦略チームに選ばれ、各年度10万円の活動資金をいただいていることができました。

今後も、生徒たちがグローバルリーダーとして活躍し、多文化共生コミュニティの実現に貢献していくことを願っています。



日本人外国人合わせて100人以上が参加。17の国籍の人々が参加しました。



【防災グローバルリーダーズ 5年次 尾方心】

昨年度から今年度にかけてのパワーアップとして、茨城工業高等専門学校とコラボレーションを行いました。日本人参加者の防災知識をさらに深めるため、日本人にはあまり知られていない防災に関わるテクノロジーを活用した競技を新たに取り入れました。また、昨年度のイベントに参加した外国人の方から「やさしい日本語が理解しづらい」という意見を受け、今年度は1競技目にやさしい日本語について学ぶ競技を取り入れました。さらに、準備段階では茨城大学の方や日本語教室に通われている方々から助言をいただき、表現や伝え方を見直すことで、参加者全員が内容を理解できるよう工夫しました。加えて、災害時に特に重要となる「共助」の意識を育てることを目的に、参加者全員が協力して行う競技を多く取り入れました。その結果、競技中には参加者同士が自然と声をかけ合い、助け合う場面が多く見られました。防災運動会は、言語や国籍の壁を超えて、楽しみながら防災を学び、助け合う力を育てるイベントです。今後も、より多くの方が安心して参加できる場を目指し、内容の改善を続けていきたいと考えています。



3.3.2 グローバルゼミ（3年次未来探究）

中等3年次からは、1、2年次に取り組んできた「地域探究」を深化させ、「夢探究」が始まります。生徒は各自の興味・関心をもとに4つのゼミから1つ選んで所属します。その中の1つ、グローバルゼミではその名の通り、地域が抱えるグローバルでありローカル（地域）でもある、グローバルな課題の発見、解決について深めていきます。



その中の取り組みの1つに、英語以外の第2言語習得入門があります。生徒は中国語、韓国語に分かれ、ネイティブの先生たちに全6回にわたり、中国語・韓国語講座を行ってもらい、それぞれの言語で基本的な自己紹介ができるまで練習します。最終回の合同発表会では、ネイティブの先生たちもびっくりするほど上達します。



後期は、茨城大学の瀬尾クラスと合同で、多様な生活背景を持つ生徒たちが安心して暮らすことのできる「理想の学校」について考えていく課題解決型の学習に取り組んでいきます。今年度の「探究デイ」においても、県内で最も外国籍住民の割合が高い常総市において長年外国人支援に取り組んでいる茨城

NPO センターコモンズ様にお話を聞かせていただき、同団体の取り組みなどを学ぶことで、「理想の学校」について考えるヒントをもらいます。その他にも、常総市のスリランカ寺院見学など、1日のグローバルツアーを通してグローバルな感覚を身につけていくことができました。また、探究デイで観察したことに基づき、今度は茨城大



学の留学生たちと、「勝田中等を10年後に理想の学校にするためにはどうしたらよいか」についてディスカッションをし、それぞれのグループで提案プレゼンをしました。こうした取組が基礎となって、後期課程の高校生における多様性をめぐる社会実践に発展していきます。



3.4 海外との交流・研修

3.4.1 グローバルデイ

5月13日(火)、中等1～5年生を対象に、グローバルデイを実施しました。第1部のテーマはイタリアです。オープニングセレモニーでは、本校で受け入れている留学生の紹介や、留学から帰国した本校生のプレゼンテーションを行いました。第一部はイタリア文化会館の職員の方にお越しいただき、イタリアに関する基礎知識やイタリアの挨拶やジェスチャーについて学びました。参加した生徒たちからは、次のような感想がありました。



【生徒感想】・言語の特徴(フランス語に似てるところがあったり)芸術や学校生活など、知りたかったことがしれて楽しかったです。(中5生徒)・イタリアの食文化については以前から興味があったので、お話を聞くことができ良かったです。(中4生徒)・身振り手振りがイタリア語には大切だと分かった。イタリアの高校は朝が早いけど帰れるのが早くて良いなと思った。(中3生徒)・イタリアには、世界遺産がたくさんあったり、伝統の食文化もあって、文化が多様だということがわかりました。(中2生徒)

放課後には、グローバルデイ第2部として、教育起業家の白川寧々さんをお招きしご講演をいただきました。タイトルは、「グローバルってどういうこと?思ったよりチャンスはたくさんあるから、今やれること全部教えます」の会です。白川さんは、中学・高校時代に独学で英語を学び、アメリカの大学に進学され、卒業後には、米国大手コンサルティングファーム勤務を経て、マサチューセッツ工科大学(MIT) MBA 修了、現在は、日本内外のグローバルリーダーや、官公庁、全国各地の教員、企業人、大学生や高校生を対象に海外大学進学を推進しています。ご自身の体験も交えながら、海外で学ぶことや働くこと、目標の立て方や学習に対する姿勢、価値観について、グローバルな視点からお話してくださいました。

【生徒感想】・貴重なお話をいただきありがとうございました。白川さんのお話から、英語の学習の大切さやアントレプレナーシップ教育について学びました。僕は海外大学に行きたいと考えたことはなかったのですが、白川さんのお話を聞いて、学べることや卒業後の将来を見据えることができ、進路を考えるきっかけにもなりました。日々の学びでは得られない、僕にとっての大きな刺激を得ることができてとても楽しかったです。本当にありがとうございました。(中5生徒)・ The seminar by Shirakawa san was very interesting. I always feel bad about having no dream for my future, but I learned that it was important to make what I want to do in the future break out into small pieces. I will seek what problems I want to solve in my daily life and my trip to America in summer. Listening to people working all around the world like Shirakawa san always increases my future choice. I know I have to think of my future career more deeply now because I am already in my 2nd year of high school. (中5生徒)

3.4.2 令和7年度オーストラリア研修

1 目的

海外交流校 (Broadford Secondary College) での授業参加 (外国語科 (日本語)) 及び教育・文化施設の視察を通して、異文化に対する理解を深めるとともに、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

2 派遣期間

令和7年7月24日(木)～8月1日(金)

3 派遣地域

オーストラリア (メルボルン、ブロードフォード、シドニー)

4 訪問校

Broadford Secondary College
Broadford 3658, Victoria, Australia



5 研修内容

- (1) 交流行事 (訪問校の日本語クラス、ホームステイファミリー、その他の生徒との交流)
- (2) 授業 (日本語クラス) 参加 (本校生徒による日本紹介のプレゼンテーション等)
- (3) ホームステイ (7月26日～7月30日 4泊4日)
- (4) 視察研修 (メルボルン市内、シドニー市内等)

6 派遣人数

20名
中等5年次生 7名 (男子3名女子4名)
中等4年次生 3名 (女子3名)
中等3年次生 10名 (男子2名女子8名)

7 派遣費用

32万円程度

8 研修生を決定するまで

- 1月: 上旬 募集開始 下旬 参加希望の生徒・保護者に向けた説明会
- 2月: 中旬 研修生選考会 (筆記試験・面接・作文) 下旬 研修生決定・通知
- 3月: 中旬 第1回保護者会、事前研修開始
- 4月～7月 事前研修 (毎週)
- 9月10月 事後研修 (毎週)

9 研修の実際

(1) 事前研修

自己紹介、家族紹介、プロフィールの作成、場面による英会話
日本紹介のプレゼン準備、個人探究のテーマ作り
業者によるオーストラリアの紹介、ホームステイのQ&A

(2) メルボルン視察 (ガイドによる団体行動)

セントパトリック大聖堂、キャプテンクック生家等視察

(3) 授業への参加



- ①日本紹介 武道、流行語、知育菓子行事等4人グループでプレゼンテーション
 - ②自己紹介・ホストファミリーと日曜日にしたこと等について、ブロードフォードの生徒と聞き合う
 - ③好きなことについて書いた英文をブロードフォードの生徒に読んでもらい、感想をもらう
 - ④ブロードフォードの生徒の日本語を使った話を聞き合う。
- (4) ホームステイ
(5) シドニー班別自由研修
シーライフシドニー、水族館、ワールドライフシドニー、QVB、ルナパーク等
- (6) 事後研修
- ①個人探究レポート
 - ②授業参加・ホームステイについてのまとめ
 - ③シドニー班別活動についてのまとめ
- (7) 研修の成果と課題
事前研修に積極的に取り組み、学校交流でもホームステイでも英語でのコミュニケーションを楽しむことができた。ブロードフォードの先生から本校生の前向きな姿勢についてお褒めの言葉をいただいた。一方で、個人探究のテーマ設定に苦慮する生徒もいたので、より効果的なサポート体制をつくっていく必要がある

]

3.4.3 R7 豪華客船おもてなし

常陸那珂港（茨城港）は東京都心から直線距離で100kmという好立地にあります。東京湾や横浜港からのクルーズ船の立ち寄り場所としても適していることから、毎年世界中を旅する大型クルーズ船の立ち寄り先になっています。そこで茨城県、ひたちなか市は観光PRの場として、本校を含む地域の中高生にとっては、海外からの観光客をもてなすために普段の授業で身につけた英語力を発揮する絶好の場面として参加しています。

今年度も、8月には有名なダイヤモンドプリンセス号と、10月にはリビエラ号が入港した際に、本校からも2回で希望者合計約20名の生徒たちが参加しました。

初参加の生徒たちは、まずクルーズ船のそのあまりの大きさに驚きます。いざ下船が始まると、観光客だけではなく、船内で働いている従業員の方々も、休憩時間に出てきて生徒たちと交流を持ってくれることもあるので、生徒にとっては「こんな世界を旅する仕事もあるのか」、と自身のこれからのキャリアを考える上での一助になっています。生徒たちは、最初はどうしても自分の英語が本当に通じるのか？と自信がなく、目の前をどんどん観光客が素通りするのを見ているだけですが、徐々に勇気を持って話しかけることができるようになります。マップを示しながら観光地の魅力や、行き方、所要時間を伝え、コースを提案する生徒もいました。生徒たちは英語を使う環境さえあれば、本当に自分たちの殻を破っていくことができることを教員としても実感します。今年も有意義なイベント参加となりました。



3.4.4 オーストラリアの高校生とのオンライン交流

本年度は、中等3年次と中等5年次生が、プラットフォーム「オントモ」を用いて、オーストラリアの高校生とオンラインで交流を行いました。英語と日本語を用いてコミュニケーションを取ることでお互いを知り、またそれぞれの外国語学習に役立てることができました。お互いの自己紹介や学校、地域の紹介をし、互いに質問をし合いました。Ravenswood School for Girls はシドニーにある女子高、Knox Grammar School はシドニーにある男子校です。どちらも名門校です。

実施日

6月3日 3年A組 Ravenswood School for Girls

6月11日 3年B組 Knox Grammar School

6月23日 3年C組 Knox Grammar School

9月13日 5年C組 Knox Grammar School

生徒感想（5年次 東間ナナアコマー）

オンラインでオーストラリアの子と話をするたびに、話せる話題も使える言葉も増えるので、英語力もコミュニケーション力も上がるのがわかってとても楽しいです。私が会話をした子は、日本のアニメがとても好きで、日本語がとても上手だったので、たくさん日本語でも話せました。新しい言葉を教えてあげることができたこともとても楽しかったです。



3.4.5 WSCへの参加（ワールドスカラズカップ）

拠点校 5年次 雨谷 奈々

私は、4月に行われた東京大会を突破して、7/25~7/30に韓国のソウルで行われた、World Scholar's Cup(WSC)に参加してきました。WSCとは、英語で教養を競う大会のことで世界中から参加者が集います。本大会への参加は、次世代グローバルリーダー育成プログラム(NGGL)の一環として行われ、本校からはNGGL参加者である3人が渡航しました。大会では、NGGLに参加する他校の生徒と3人1組のチームを編成し、各競技に臨みました。

WSCには、4つの競技があります。1つ目がTeam Debateです。与えられたテーマに対して、チームごとに賛成側と否定側に分かれて、英語で意見を述べ合います。日本国内のディベート大会では、エビデンスやフォーマットに沿った論理的な構成が重視される一方で、ソウル大会では、エモーショナルで心を惹かれるようなディベーターが多く、感情に訴えかける表現や話し方が重要視されているように感じました。論理だけでなく、相手に「伝える」姿勢の大切さを学びました。

2つ目がCollaborative Writingです。チームで協力して、1人ずつそれぞれのトピックについてのエッセイを書きます。形式は自由で、私はラップを書きました。私のチームメイトは、この競技が得意でゴールドメダルを獲得していました。3つ目

は、Scholar's Challengeです。今年の大会テーマである「Reigniting the future」に関する膨大な量の事前資料から問題が出されるマーク式のペーパーテストで、1番苦しい競技でした。東京大会では、全く歯が立たず悔しかったので、ソウル大会のために科目を絞って勉強をして、1つの科目でメダルを獲得することができ、とても嬉しかったです。4つ目は、Scholar's Bowlです。チームで挑む早押しクイズ大会です。動画や写真のクイズが多く、チーム3人で楽しみました。チームメイトが正解を連発したおかげもあり、見事ゴールドメダルを獲得することができました。



また、WSCには、競技以外にも楽しいイベントがあります。Scholar's Showでは、日本団でソーラン節を披露しました。前日にホテルで1度練習しただけでしたが、大和魂を世界に見せつけることができたと思います。Cultural Fairでは、国ごとにブースがあり、色々な国のブースを回っていたら、いつの間にか、色々な人からもらったもので両手がいっぱいになりました。他にも、ツアーに参加したり、ダンスパーティーで盛り上がりたりと、充実した時間を過ごすことができました。

私は、WSCを通じて、英語を母語とするかに関わらず、準備や工夫の積み重ねが良い結果につながることを実感しました。今まで、英語を母語とする人たちには勝てないと思ってしまっていたのですが、Scholar's Challengeでは勉強をしたおかげでメダルを獲得することができ、これからグローバル化していく社会でも英語で勝負していく自信ができました。しかし、ディベートでは3戦3敗で全く結果を残せず、スピーキング力や表現力、即興力の稚拙さを痛感しました。そして、大会で見つけた私の英語の課題を、これから準備や工夫の積み重ねで乗り越えていきたいと思っています。



また、私のチームは、ソウル大会の結果、Tournament of Championsと呼ばれるアメリカのイエール大学で行われる決勝大会への出場権を獲得しました。私は出場を見送ることとなりましたが、出場権を得られたことに自信を持ち、今後も世界への挑戦を続けていきたいと思っています。

3.4.6 全国高校生フォーラム

拠点校 5年次 金子凜音

私は、12月に東京で行われた全国高校生フォーラムに、同級生と後輩、合わせて4人で参加しました。全国高校生フォーラムは、文部科学省が実施するWWL およびSGH に参加する全国の高校生が集まり、各校で取り組んでいるグローバルな社会課題の解決策や提案について、英語でポスターセッションを行う全国規模の大会です。また、生徒同士の交流と相互理解を促進するディスカッション形式の生徒交流会も実施され、国際的な視点や多様な価値観に触れる貴重な機会となりました。

初めに、私たちはポスターセッションを行いました。

「Tutor System Of the students By the students For the students」をテーマとした、今年度から実施しているチューター制度についての発表をしました。チューターとは、学生の学校生活をサポートする存在のことです。以前、私たちの学校に来ていた留学生在が言語の壁に直面していたことや、私たち自身が他クラスの留學生と交流する機会をつくりたいと感じたことから、この制度を立ち上げました。ポスターデザインでは、制度立ち上げに向けて起こしたアクションが循環し、チューター制度が成り立っている様子を色のグラデーションで表現しました。また、制度を立ち上げた立場、留学経験者の立場、留學生をチューターとしてサポートした立場という異なる視点をもつ私たち4人だからこそ、唯一無二のポスターセッションを行うことができたと感じています。審査員の方からは、このチューター制度をどのように後輩へ継承し、全国の学校へ広めていきたいかという質問をいただきました。そこで、私たちは実際に作成した日本人生徒向けのチューター制度ガイドブックを提示し、これを活用して制度を広めていきたいという考えを伝えました。決勝進出には至らなかったものの、審査員の方からは高い評価をいただきました。この悔しさや学びは、今後の研究に繋げ、深めていきたいです。



ポスターセッションの後には、生徒交流会がありました。一部屋に10校以上の生徒たちが集まり4

つのグループに分かれ、3つのお題の中から各班1つ決

め、ディスカッションをしました。私たちの班は、

「Future of education」という、教育の在り方が急速に変化している中で、私たちが「学びの当事者」として未来の教育の在り方を考えるというテーマを選択しました。その中でも、生徒それぞれの意見の中で特に触れられていた「AI」という言葉をディスカッションをする上でのキーワードとして、進めていきました。学校によって、AI使用の制限や使用方法が違うなどと様々でした。最終的には、各グループで一枚の大きな紙に意見をまとめあげ、代表の人が発表をしました。生徒交流会は、普



段関わることのない同世代の人たちと交流でき、新しい視点を学べた良い機会となりました。

午後からは、私たち含め参加者全員が見守る中、決勝戦が始まりました。最新技術である3Dプリンターとプログラミング教材を使い、高齢者の服薬忘れや孤独死を防ぐための服薬管理システムを制作していた学校もありました。その一方で、誰もが食事を作る過程も楽しめるように、調理過程を全自動にするのではなく、自らできることを最大限に活かせる自助具を制作している学校もあり、様々な分野での研究成果を聞くことができました。最優秀賞を獲ったのは、国際的に深刻化するフードロスに着目し、幼稚園児に食べ物の大切さを伝える活動を行った学校の発表でした。

彼女たちの学校には、生徒が自ら社会課題を見つけ、解決策を考え行動に移す学びの活動があり、その一環で今回発表していた研究をしていたそうです。それに似たように、勝田中等教育学校には探

究活動の授業があります。私たちが発表したチューター制度も、この探究の時間を土台として、形に
ていきました。後輩たちにも、探究活動の時間を通して取り組んできた研究をもとに、全国高校生
フォーラムという貴重な舞台へ挑戦し、研究発表を通して、さまざまな同世代の生徒と刺激を受け合
う機会にしてほしいです。

3.5 国内先進校の視察

3.5.1 東京都立小石川中等教育学校

視察（令和7年6月18日）

1. 小石川中等教育学校について

小石川中等教育学校は、1918年創立の歴史ある学校で、2006年から中等教育学校になった。その際に文部科学省スーパーサイエンスハイスクール第1期指定校となり、現在も指定されている。

教育課程は文系・理系にクラスを分けずに全員がすべての教科・科目をバランスよく学ぶこと、4年生から自由選択科目として第2外国語を学ぶこと、6年生で週22時間の特別選択講座を配置している。また、教育課程上最大の特徴は、全員が6年間を通して課題探究型学習「小石川フィロソフィーⅠ～Ⅵ」に週1～2時間取り組むことである。

2 小石川フィロソフィーについて

小石川フィロソフィーは第1学年から第6学年まで学年ごとに課題研究を行っている。Ⅰ言語スキルは国語科が担当し、クラス単位でビブリオバトルやスピーチコンテストを行う。Ⅱ数量スキルは数学科が担当し、統計の基礎を学ぶ。Ⅲプレ課題研究では教科ごとの講座で課題探求の手法を学ぶ。Ⅳ理数探究基礎は週4時間で、理数探究基礎（2時間）情報（1時間）人間と社会（1時間）を充て、研究の計画と実践の方法を学ぶ。Ⅴ課題研究では各自がテーマを設定し計画を立てて研究を進める。Ⅵ成果の発信では、Ⅴで取り組んだことを論文にまとめる。論文は1人1本作成する。今回見学したⅤ課題研究は13種類のゼミに分かれて課題研究を行っている。1学期は教員の講義、生徒の調べ学習、実験など進め方はゼミごとに異なる。年度末に講座ごとでまとめを行う。

3. 授業見学

①小石川フィロソフィーⅤ「物語研究」

先行研究（現象学理論、受容理論、記号論など）をグループでスライドにまとめて発表していた。見学した際は現象学理論について4人が発表し、発表を聞いた生徒全員が質問か感想を言うようになっていた。全員が文学理論に触れ、難解な先行文献を読み解くことで2学期以降の個人研究に進めるよう設定されていた。

②小石川フィロソフィーⅤ「数学情報研究」

1学期は研究に必要なスキルアップに取り組んでおり、総務省統計局が提供している教育用標準データセットSSDSEを用いた統計データ分析を用いて、各自が設定したテーマの中間発表を行っていた。「地元進学率から地域活性化を考える」、「旅行・行楽の頻度の要因について」、「過疎地域と過密地域の運動量や生活習慣による死亡数」など、学生ならではの視点でのテーマ設定がなされていた。7月から具体的な研究に入り、レポート形式で仕上げ、「統計データ分析コンペティション2025」に論文応募する予定である。

4. その他

①選考問題について

都立の中高一貫校では、都の共同作成問題と、学校独自の問題を組み合わせて、適性検査が実施される。小石川中等では、検査Ⅰが共同10割、検査Ⅱが共同3割独自7割、検査Ⅲが独自10割で構成されており、記述問題の分量が非常に多く、入学後の教育活動が反映された適性検査となっている。

②入学者選抜における男女別定員の廃止について

都立中等教育学校の入学者選抜においては、2025年度（令和7年度）入試から男女別定員が廃止された。小石川中等においてはその影響はほとんどなく、入学者は男女ほぼ半数ずつとなったとのことである。

1 都立国際高校概要

都立初の国際学科を有する高校として平成元年に創立。平成27年に海外大学への進学資格が取得できる国際バカロレア(IB)のディプロマプログラム認定校となる。IBコースはすべての授業を英語で行っており、IB校の中でも珍しい(県内でIBを行っている茗溪学園は日本語と英語併用のIBです)。IBコースは1学年25人程度。ほぼ全員が海外大学を受験し、そのうち7割ほどが海外大学に進学している。国際科レギュラーコースは1学年240人程度。外国人や帰国子女が多く、日本語、英語ともにレベルに大きな差があるため2クラスを5展開にして授業を行うなど、少人数で授業を行なっている。レギュラーコースでは高校での留学をする生徒が多くいる。IBコース、レギュラーコースともに、英語や他の言語のネイティブ教員が多くいる。IBの授業では、知識を教えるような授業はほとんどなく、知識をつけるのは家でやってくる。それをベースに考えたり、討議したりする授業が中心。

2 海外大学進学について

- ・海外大学進学を考えるならば、IBはとてもよい。高3の11月にあるIBの最終試験で合格すれば、海外大学に出席できる。大学によって求める点数が異なる。イギリスやオーストラリアの大学はIBでなければ、ファンデーションコースが必須。
- ・アメリカやカナダの大学はファンデーションコースがないのでIBじゃなくてもやりやすい。
- ・ドイツやオランダなどのEUの国もおすすめ。学費が安い。英語で学べるし、生活も英語で問題ない。
- ・海外大学進学については人脈作りが大事。JASSOの海外大学進学フェア、EUフェア、アメリカフェアなどに、生徒保護者だけでなく、教員が出て行って、大使館や大学に繋がりを作る。学力ベースというより繋がりベースで進学先が見つかる。
- ・フェアなどに参加してつながりを作り、学校で説明会などをやってもらう。生徒達は何度かそういった説明会に出ていると変わってくる。
- ・文科省のIBコンソーシアムの団体会員になっておくと、シンポジウムなどに参加できてよい。
- ・柳井財団、笹川財団の奨学金は一部の一流大学にしか奨学金が出ないので厳しい。狙い目はJASSO。
- ・都立国際のIBコースはほぼ全員が海外大学を受験するが、実際に海外大学進学するのは7割程度。奨学金が取れたら海外に進学という生徒が多い。カナダは奨学金が得られなかったとしてもIBの点数が良いと学費の値引きも多い。オーストラリアではバイトができる。

3 海外大学進学後の就職など

- ・アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、EUは就職フェアがあり、心配ないが、アジアは就職につながるかどうかはまだ不安。

4 人事など

- ・IBコースの教員も日本人は、公務員(都立高校教諭)。給与等も一般教諭と同じ。
- ・都立高校は6年で異動、10年以上はない。IB研修生として毎年2人の先生を迎えて、IBの資格をとりながら研修していく(週1玉川大学のプログラムを受けて資格を取る)。

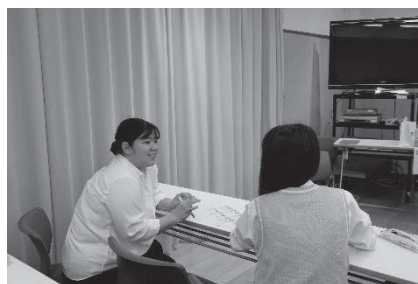
5 その他

- ・今回はIBコースを中心に見学させていただき、お話を伺ったので、本校がそのまま取り入れられることは少なかったが、海外の大学を目指すための道のりや、そのための授業のあり方など、学ぶことが多くありました。東京都と茨城県の生徒の層やニーズの違いなども感じました。

第4章 連携校との取組

4.1.1 海外大学進学イベント～柳井スカラーズキャラバン～

令和7年6月28日（土）14:00～17:00、本校洗心館において、公益財団法人柳井正財団より講師をお招きし、海外大学進学奨学金についての説明会「柳井スカラーズキャラバン」を実施しました。本校生、他校生、保護者あわせて20名の方が参加してくださいました。当日は、ハーバード大学やイエール大学、オックスフォード大学など英米の名だたる有名大学に、柳井奨学金を活用して進学した奨学生5名が来てくれました。特に日立一高からハーバード大学に進学した松野知紀さんは、4年前に本校が開校した年にも「みらたんカフェ」の講師として来てくださったことがあり、当時の生徒と再会を喜びました。



日立一高からハーバード大学に進学した松野さん 奨学生はフレンドリーで優しい方々ばかりでした！

第1部では柳井スカラーズキャラバンについての説明に加え、奨学生の皆さんからそれぞれの大学やご自分が勉強した内容などについてプレゼンがありました。アメリカの大学は日本のように文系・理系に分かれてから受験をするのではなく、まずは入学して幅広く勉強してから自分の専攻を決めることができることや、イギリスの大学では、最初から専攻を決めて、少人数で深く専門的に学ぶなど、国によって大学の在り方が違うこともわかりました。

その後のパネルディスカッションでは、「推し活」という身近なテーマから「大学の様子」「高校時代の考え方」「海外を目指し始めた時期・きっかけ」というテーマまで、アットホームな雰囲気でお話いただきました。早くから海外大学を目指して準備した人もいれば、高3で決意を固めてからラストスパートをかけた人まで様々ですが、どの奨学生も「自分の夢に向かって一歩踏み出す」ことの大切さを熱く語っていました。

第2部では生徒向けにはワークショップ、保護者向けには留学に関する説明を行ないました。特に保護者向けの説明では、海外大学に申請するときに必要な様々な書類について細かく説明もありました。

今回のイベントについて生徒の感想の一部を紹介します。

- ・はじめは海外大学という選択肢をあまり考えていなかったのですが、奨学生のみなさんが自分の夢や目標に向かって進んでいる姿を見て、私もそんな風になりたいと思いました。
- ・今回のイベントは自分のことと将来を見つめなおす機会になりました。財団の皆さんがとても親身にやさしく会話してくれたおかげで楽しみながら自分の視野を広げることができました。

4.2 各連携校からの報告

茨城県立日立第一高等学校・附属中学校

1. 本校の概要

1927(昭和2)年、県立日立中学校として創立。間もなく100周年を迎える。誠実勤勉・剛健質実等の校訓を掲げ、進学実績と部活動等の両面で実績を積み上げてきた。2012年には附属中学校も開校。現時点での定員は、高校240名・中学80名で、在籍は約950名。2007年からSSHの指定を受け、現在第Ⅳ期の4年目。2015年にはサイエンス科(2&3年次)を設置し、次世代の中核となるグローバル人材の育成を目指している。SELHiの指定実績(2003年～)もあり、県北地域の雄として、各種先進的取り組みを実践している。

2. 連携校における特色ある取組

(1) 海外(英国)研修

2003年より約10日間の英国研修を実施。ロンドン近郊のロイヤルラッセルスクール(1853年～)で開催される模擬国連(MUN)への参加が最大の特徴。世界各国からの参加者と共に英語で議論を行い、国際感覚や交渉力を磨く貴重な教育機会となっている。生徒たちは、実社会に即した外交的なスキルと、多角的な視点を得て帰国する。この活動への参加を理由に本校を志願する生徒も存在する。



(2) 高大連携事業

大学と連携し、専門知識や研究に触れる機会を提供し、学習意欲と進路意識の向上を図っている。茨城大「最先端科学技術」・茨城キリスト教大「英語総合講座」・横浜国大「数学力育成」等、専門分野に特化した内容。

(3) 研修〔修学〕旅行 in 海外

中学3年の2月に、4泊5日のシンガポール研修旅行を実施。高校2年次の12月に、普通科は3泊4日の台湾修学旅行、サイエンス科は4泊5日のヴェトナム研修旅行を実施。それぞれ、班毎に研究テーマを決めて課題研究に臨む。

(4) ブリティッシュヒルズ語学研修

中学2年では、福島県の同名施設で、2泊3日の英語漬けの生活を送り、異文化体験及びコミュニケーション能力の向上を図る。

(教諭 田村 裕一・遅塚 恵子)

(5) 各種プロジェクトへの参加



国際的な視野を広め、国際社会及び地域社会の

リーダーとして貢献できる人材を育成することを目的とした語学研修プロジェクト等にも参加している。

○チャレンジプロジェクト

中学3年希望者を対象にTGGで実践的な英語活動を実施。最終日には、留学生と英語でコミュニケーションを取りながらの街歩き活動を通して、実践的な英語運用能力の向上を図る。



○英語プレゼンテーションフォーラム

(6) ホームルームセミナー

中学と高校1年次対象の職業人講話。各方面の専門分野で活躍する社会人講師の講演を聴き、学習と進路への意識を高めることを目的としているが、内容が世界規模に及ぶものが多く、視野を広く世界に向けた契機ともなっている。

3. WWL連携校としての取組

○茨城大学における先取り履修

募集に応じ、国際共修(ベトナム)【2単位】へ1名、(ミネソタ)【1単位】へ2名が参加が認められた。2026年6～12月の集中講義が予定されている。

4. 課題と展望

(1) プロジェクトの多様化への期待

本校独自の海外(語学)事業に加えて、今年度はトビタテ!(文部科学省)によるフィンランド派遣があり、更に1名が申請中である。生徒にとって、多チャンネル化は機会の増加に直結し、文科省の方針とも合致する。

(2) 校内(中&高)連携の更なる強化

6年間を見通した継続的かつ計画的な教育活動の見直しと再構築を図っていきたい。

1 本校の概要

創立125周年を迎える歴史ある伝統校で、敷地内には国指定重要文化財の旧講堂を有する。「至誠・剛健・進取」を校訓に掲げ、「私の未来は私が創る」を合言葉に主体的な学びを推進している。教育の特色として「探究活動・シティズンシップ・ダイバーシティ」の3本柱を掲げており、進学重視型単位制のもと、ICT活用や少人数授業、55分授業を展開している。特に国際交流は45年の歴史があり、海外研修や留学支援などグローバルな視野を養う環境を整えている。

2 連携校における特色ある取組

ダイバーシティ教育推進チーム発足

昨年度よりダイバーシティ教育推進チームが発足し、後述する企画を行っている。

「アジアの架け橋プロジェクト+」生徒受け入れ

昨年度より文部科学省補助事業である「アジアの架け橋プロジェクト+」に参加する生徒の受け入れを行っている。昨年度、今年度ともにタイからの生徒を受け入れ、本校生徒と4ヵ月間、学びを共にした。滞在中は、国際理解を深めるための行事である「グローバルデイ」にて自国に関するプレゼンテーションを行った。また、助言者として中学校の探究の授業に参加した。

海外中高生との交流事業

附属中では上海からの中学生の受け入れを行っており、今年で3年目となる。セレモニーでの文化紹介、グループでの街歩きを行った後、給食を共にした。また、高校ではマレーシアからの生徒の受け入れを行った。伝統文化の相互紹介や理科の実験を通じた交流、礼拝の見学等を行った。

グローバルデイ

昨年度より中高合同で国際理解を深めるためのグローバルデイを実施している。午後2時間の授業を使用し、前半は長期留学や本校の海外派遣事業スタディツアー等で海外体験をした中高生の発表やパネルディスカッション、本校

への留学生の発表を行った。後半は外部講師からの講話を賜った。

海外スタディツアー

昨年度は課題解決型探究活動を中心とするベトナム・スタディツアー、英語力向上を目指しながら課題解決型探究を行うオーストラリア・スタディツアーを実施した。本年度はシンガポール・スタディツアーとオーストラリア・スタディツアーを計画している。シンガポール・スタディツアーにおいては課題解決型探究活動を中心とし、起業家精神を学ぶプログラムを充実させた。オーストラリア・スタディツアーにおいても課題解決型探究活動を中心としながら、自然環境に触れるためのプログラムの充実を図った。

長期留学希望生徒の支援・受け入れ

2年前より長期留学生の派遣支援を行っている。2年前はフィリピン、ポーランドへの長期留学生が計2名、昨年はノルウェー、エクアドルへの長期留学生が計2名、今年度はエストニアへの長期留学生が1名である。来年度もフィリピンとアルゼンチンに計2名の長期留学が決定している。また、留学支援の団体から依頼により、長期留学生の派遣先であるエストニアからの長期留学生の受け入れを行った。

3 WWL 連携校としての取組

令和7年度茨城県WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る茨城大学における先取り履修受講に1名の生徒が参加した。

4 課題と展望

(1) 6年間の計画の見直し

これまでの企画の検証が必要である。附属中学校で学んだことをより効果的に深い学びにつなげられるような運営を行う必要がある。

(2) 校内におけるリーダー生徒の育成

中高一貫校の特色を最大限に活かし、他者を理解しながら、周囲を巻き込んでいける校内のリーダー生徒の育成に注力したい。

茨城県立水戸第一高校

1 本校の概要

明治11年(1878年)に創設され、147年の伝統を持つ進学校。進学重視型単位制の導入、医学コースの設置、附属中学校の併設による中高一貫教育校化等の改革を進める。学問第一を旨としつつも、学校行事、委員会活動、部活動にも自主的かつ協働的に取り組む学校である。公共・公益部門職員による講演や霞が関訪問、社会のトップランナーとのキャリア対話、米中派遣や海外研修等を通して、茨城、日本、世界を背負う若者を育成し、海外進学希望者の支援にも努める。

2 連携校における特色ある取組

(1) +4学年活動

和が4になる2学年(高1と中3、高2と中2、高3と中1)が合同で活動する。また、+4学年を3階建て校舎の同じフロアに配置し、生徒どうしの日常的な交流を促す。

発達段階の近さを活かし、共に学問や世界への関心を高められるように、各分野の研究者による最先端の講義「文理・融合講座」は高1・中3で、中だるみを排し、自己や社会に対する研究を深めるため、第一線で活躍する社会人との「キャリア探究対話」は高2・中2で、中高のスタートに当たり、やり抜く力を高めるため、医学・心理の専門家による最後までやり抜く力を高める講座「GRITセミナー」は高3・中1で実施。

(2) パブリックリーダースクール

公的機関のリーダーによる講演や国会・霞が関で研修を行う。中高全学年合同企画で、国境なき医師団など世界的に活躍する講師も招き、国内外に関心を広げている。

(3) 知道プロジェクト発表会

高1の後期から1年以上かけて、各自が設定したテーマに対して探究活動を継続し、その成果を大ホールで披露する。中学生も探究活動に取り組み、大ホールで発表する。高2・中2に探究力向上セミナーを実施し、大学研究者等から探究の技法を学ばせる。

(4) 米中派遣・海外研修

高1と中3の希望者を米国・中国(今年度は台湾)の二方面に派遣。大学、高校、企業を訪問。学校独自の奨学金も用意。中3海外研修ではシンガポールとマレーシアを訪問。

(執筆者名 小野瀬勇一)

(5) 知道図南会

第一志望を貫き捲土重来を期する一浪生をサポートする「知道図南会」を設置。第4学年の主任と担任を配置して支援する他、在校生の授業時間帯に学習館を開放したり、高3と同じ校内模試や外部による模擬試験を校内で実施したりしている。

(6) 海外大学進学相談会

国際担当の教員による、海外大学進学や留学に関する希望者対象の説明・相談の場。各種情報の提供や個別相談などにも対応。

3 WWL 連携校としての取組

国際担当が窓口となり、本校がこれまで独自に取り組んだグローバル教育の情報や経験を拠点校と交換したり、WWLの企画を、米中派遣や海外大学進学・留学等に関心のある生徒に積極的に紹介したりしてきた。国際担当は、海外大学進学の実績が豊富な私立高校等を積極的に見学したり、教員を招いて教職員対象の講演や生徒対象の講演を開催したりもした。海外に在住・勤務する卒業生に来校してもらったり、米中派遣やその事前指導で講話してもらったりもした。拠点校と隣接する市にあることを活かし、「パブリックリーダースクール」に拠点校の生徒を招待するという試みも行った。

4 課題と展望

(1) 海外大学進学・留学希望者の開拓

国内の有名大学に進学することが当然のように思われる風潮が強くなり、留学は受験の遅れにつながると考える生徒や保護者等が多い。近年は物価高や円安の影響も大きく、米中派遣のうち米国への希望者が激減した。米国以外の選択肢を提示したり、奨学金の情報を提供したりする必要があるだろう。

(2) 13校だからできる活動の企画・実現

本校単独では希望者や予算が集められず、開催が難しい活動も、WWL13校の合同開催によって実現できる可能性がある。これからも拠点校の教職員と情報交換を続け、生徒にとって魅力的な活動を提供していきたい。

1 本校の概要

本校は、大正11年(1922年)に県下7番目の旧制中学である茨城県立鉾田中学校(旧制)として創設されて以来、100年に渡る長い歴史をもつ学校である。高い教養と豊かな人間性を兼ね備えた、地域の未来を担うリーダーを育成することを基本理念とする。学校創設以来の綱領である「剛健勤勉」「独立自治」「和衷協同」の指針を堅持しつつ、“グローバル”な視点も涵養すべく、多角的な教育活動を展開している。

2 連携校における特色ある取組

(1) マレーシア研修(令和5年度)

事前の語学学習を経て、現地クアラルンプールにてキャリア研修等を行った。UPM大学でのキャンパスツアーでは、学究心旺盛な大学生と実りある交流を行うことができた。

(2) ハワイ研修(令和6年度、令和7年度)

令和6年度は、農業法人深作農園と鉾田市観光物産協会の協力を得て、ハワイ州ホノルルで開催されるホノルルフェスティバル(3月実施)にブースを出展した。深作農園が本校のハワイ研修に合わせて開発した、鉾田の特産品を用いたチョコレートを、現地ハワイの人々に試食してもらい、地元鉾田のPRを行った。観光物産協会から専門的な支援を受けながら、鉾田の情報発信活動も展開した。

令和7年度は、県内の菓子メーカーであるリスカ株式会社の協力を得て、再びホノルルフェスティバルにブースを出展し、茨城の魅力を発信する予定である。同じくブース出展予定の福井県敦賀気比高校との交流も予定している。

3 課題と展望

本校では、グローバルなものを見方ができる生徒の育成を目的として、地域的な視点と国際的な視点を関連づけた、探究的な国際教育活動を実施している。ハワイ研修に際しては、地元鉾田の魅力を再発見しつつ、遠く離れたハワイの人々にその魅力を伝えるにはどのような工夫が必要なのか検討を重ね、現地での実践的な取り組みにつなげた。その過程において、地元の企業や団体とタイアップすることにより、協働することの重要性についても学ぶことができた。

これらの実践を通して、生徒は地域社会への関心を高めるとともに、国際社会とのつながりを意識しながら、課題を捉える姿勢を示すようになった。一方で、国際的事象に関する知識や背景理解が不十分な生徒も見られ、教員による適切な支援や活動内容の工夫が課題として明らかになった。時間的制約から十分な事前学習を行えなかった点も反省すべきである。また、外部団体から協力を得るに当たって、目的意識を共有し、入念な意思疎通を図りながら進めていくことが前提となるが、その点についてもさらなる改善を進めたい。

今後、ICTを活用したコミュニケーション活動や、地域の関係機関と連携した国際理解教育を拡充するとともに、教科横断的な指導体制を整える必要がある。本校に勤務するALTの人的資源を有効活用していくことも求められる。これらの取り組みを通して、生徒が地域に根ざしつつ、世界的視野をもって主体的に行動できる力を一層育成していきたい。



左 マレーシア・UPM大学での研修



中央および右 ホノルルフェスティバルでのブース出展



茨城県立鹿島高校

(執筆者：教諭 山田 空)

1 本校の概要

本校は茨城県鹿嶋市に位置する、創立116年を迎える高等学校です。教育方針として「自治・勤勉・快活」を掲げ、進学重視型のカリキュラムで地域や国際社会のリーダーとなる生徒を育成することを目指しています。令和6年度よりWWL連携校として、他校と連携しながら各活動に参加しています。また、授業においては生徒・教員ともにICTを積極的に活用して、グローバルな課題解決能力と主体的な学びの姿勢を養う教育を推進しています。

2 連携校における特色ある取組

(1) 進路指導・キャリア教育

本校では、令和5年度高校入学生より「進学重視型単位制」を導入しています。また、一人一人の進路ニーズに対応するために、4つのコース(医療理工・理数・人文・国際)を設置しています。

進路指導としては高校第1年次で「大学見学バスツアー」、第2年次で大学から講師を招聘した「鹿島プレカレッジ」を実施し、生徒の進路決定や選択肢を広げる場を設けています。さらに卒業生講話にて鹿島高校の卒業生からの講話を聞くことで、卒業後の展望を広げることができるようにしています。

キャリア教育としては、「KASHIMA 教職セミナー」を毎年実施しており、教職を希望する生徒を対象に教育実習生や本校新任者との講話・座談会を行っています。

(2) 国際教育・科学教育

国際教育においては、国内・海外研修の実施やALT等ネイティブ教員の複数配置などを実施しています。中学校では少人数授業・習熟度別授業などで「だれ一人取り残さない」授業を目指しています。学校外の活動として、2024年度には中学生・高校生を対象にシンガポール海外派遣を実施しました。現地での大学生との交流等を通して国際的な視野を広げることを目的としています。また、2026年度はオーストラリア・ケアンズ方面への海外派遣を予定しています。

2023年度、2025年度は中学生が国内語学研修を実施しました。学校内外を問わず、生徒の興味に応じて様々な活動を展開しています。

科学教育においては、令和7年度文部科学省DXハイスクール採択校として、医療・理工コースや理数コースを中心に、3Dプリンターや数理モデルを利用し、実験やものづくりを通して、様々な技能の育成を図っています。

3 WWL連携校としての取組

2025年度には、本校高校2年次4名が茨城県高校生フォーラム・全国高校生フォーラムに参加しました。県・全国ともに「多文化立食パーティー ～お互いを理解するために～」というタイトルで、学校にて企画したALT等ネイティブ教員との国際理解のための催しについて発表しました。ポスターセッションの他にも、他校の生徒の皆さんとのグループワーク・交流会や講話を通して多様性の社会における日本人について視野を広げることができたのではないかと思います。

4 課題と展望

(1) 中高一貫教育校として、中高連携のなかで、学習の連続性と、学びの多様性確保のための取り組みを継続する必要があります。今後は大学進学率が増加することを見据えて、教科学習に加え、DXハイスクール事業の一環で整備されたSTEAM Labを積極的に活用し、探究的な学びをより深く行える環境づくりに取り組みます。

(2) 中学で始まった海外体験研修に続き、高校ではより異文化体験、語学研修を深めることのできる海外研修を企画、運営していきたいと考えています。そのための英語力育成、コミュニケーション能力の開発などを行っていきます。英語圏だけではなく、地域の外国人コミュニティとも連携し、よりグローバルな視点を持った人材育成に取り組んでいきたいです。

1 本校の概要

本校は、明治 30 年に茨城県尋常中学校土浦分校として開校し、その後茨城県立土浦中学校を経て、昭和 23 年に現在の茨城県立土浦第一高等学校と改称した、およそ 130 年の歴史をもつ県内有数の伝統校である。明治期に建築された旧本館は国指定重要文化財として保存されており、学問と文化の象徴として生徒の誇りとなっている。

校訓は「自主・協同・責任」であり、「志のみ持参」という言葉を合言葉に、高い目標を掲げて主体的に学ぶ校風を大切にしている。

進路面では、長年にわたり東京大学や国公立大医学部をはじめとする難関大学への進学実績を積み重ねており、高い学力志向と向上心をもった生徒が集う、茨城県の「アカデミックフラッグシップ」としての役割を担っている。

2 連携校における特色ある取組

(1) 授業第一主義と高度な進路指導

60 分授業を軸に基礎・応用を体系的に身につける教育課程を編成し、質の高い考査問題をペースメーカーとしながら、きめ細かな指導体制を整えている。東大研・医学コースでは専門的な講義や面接対策等を実施し、生徒の難関大学進学を強力に後押ししている。

(2) 好奇心を刺激する探究学習

生徒自らが問いを立て、調査・分析・発表に至る探究型学習を体系的に推進している。附属中 1 年の地域フィールドワークから附属中 3 年の卒業研究発表会、高校 1 年の基礎探究、高校 2 年の 6 コースに分かれた専門探究と、地域の企業等の協力も得ながら生徒一人ひとりが発達段階に応じて探究活動を深化させている。

(3) SGH の成果を継承したグローバル教育

平成 26 年から 5 年間にわたり文部科学省「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」の指定を受け、その SGH 事業で培ったグローバル教育を SEG (Science Explorers Group)・HEG (Humanity Explorers Group) の二つの海外研修で継承・発展している。

SEG では、米国ワシントン D. C. やボストンにおいて、マサチューセッツ工科大学やハーバード大学の研究室を訪問し、世界水準の研究に触れる活動を行っている。生徒は現地研究者へのインタビューや、研究アイデアの英語プレゼンテーション、世界銀行や大使館訪問、博物館視察などを通じ、最先端科学と国際社会の動きを肌で感じる機会を得ている。

HEG は、オーストラリアをフィールドとする海外探究プログラムであり、文化・社会・教育などをテーマとした現地高校生・大学生との交流や企業訪問を通じて、国際的な視野と多文化理解を育む取組である。これらの海外フィールドワークの成果は、校内の発表会だけでなく、国内の研究発表会等でも共有されており、本校のグローバル教育の中核をなしている。

3 課題と展望

高度な探究・国際プログラムは成果が大きいですが、参加者が限定されがちであるため、全生徒が国際的素養を育めるよう、通常授業の中でグローバル人材の育成を意識した授業改善を引き続き進める必要がある。また、教員の業務負担増も課題であり、ICT 活用や外部人材との協働による持続可能な運営体制が求められる。

今後は探究とグローバル教育を両輪とした学校づくりを更に推進し、国内のグローバル人材育成の中核となる学校へと一層発展することを目指していく。

1 本校の概要

本校は創立 126 年の歴史を誇る伝統校である。共学として地域に根ざした教育を行い、昭和 24 年には定時制課程を設置した。令和 2 年には附属中学校を併設し、中高一貫教育を推進しつつ、多様な学びの場を構成している。

令和 5 年度入学生より単位制高校となり、現在の学級数は、附属中各学年 1 クラス、高校各年次 6 クラスとなっている。各課程の生徒定員は、全日制 720 名、定時制 160 名、附属中 120 名である。

平成 26 年から文部科学省指定 SSH に取り組み、現在は第 3 期指定として「文理融合基礎枠」および「重点枠（革新共創）」の下、先進的な学びを展開している。

2 連携校における特色ある取組

(1) 地域課題解決型探究活動

中学 1 年から高校 2 年次までの全クラスが、研究テーマをもとに編成された班単位で龍ヶ崎市の社会的諸問題の解決を目指し、活動している。

(2) イングリッシュ・ブートキャンプ

- ・日時：令和 7 年 7 月 28 日（月）～30 日（水）
- ・場所：筑波山江戸屋
- ・対象：中学 3 年・高校 1・2 年次希望者
- ・内容：本校及び外部 ALT 5 名と外国人教諭 1 名の協力のもと、英語によるディベート・ディスカッション・プレゼンテーション等の活動を行った。

(3) レインボー国際交流

- ・日時：令和 7 年 11 月 21 日（金）
- ・場所：飛龍館 2F 多目的室
- ・対象：高校 1 年次希望者 37 名
- ・内容：流通経済大学の留学生を招き課題解決活動を行い、言語の壁を越えた効果的なコミュニケーションを体験した。

(4) 海外研修

① オーストラリア海外研修

- ・日時：令和 7 年 7 月 21 日（月）～ 8 月 1 日（金）12 日間
- ・場所：オーストラリア シドニー
- ・対象：高校 1・2 年次希望者
- ・内容：シドニー郊外の現地校である John Edmonson High School への通学をベースに、ホームステイ体験を通して、生きた英語の習得・異文化交流を行った。

② ニュージーランド海外研修

- ・日時：令和 8 年 2 月 25 日（水）～ 3 月 6 日（金）10 日間
- ・場所：ニュージーランド オークランド・ハミル

トン

- ・対象：中学 3 年希望者
- ・内容：平日は Fairfield Intermediate School へ通学、英語や他教科の授業を受け、また現地校職員を中心としたホストファミリー宅に滞在し、異文化体験を通して国際的視野を身につける。

(5) グローバル・プレゼンテーション・セミナー

- ・日時：令和 8 年 3 月 25 日（水）
- ・場所：本館 1 階 会議室
- ・対象：高校 2 年次希望者
- ・内容：有限会社インスパイアよりヴィアヘラー幸代氏を講師として招聘し、多様化する社会において活躍するグローバル人材を目指す上で必要なプレゼンテーションスキルを学ぶ。

(6) FIRST LEGO League Challenge

中学 1 年から高校 1 年次までの有志チームで、「ロボットゲーム」と「イノベーションプロジェクト」からなるプロジェクトを仕上げ、12 月に県予選会に参加した。2 月の全国大会における上位チームはさらに世界大会に出場する。



3 WWL 連携校としての取組

(1) 一般社団法人台湾留学サポートセンターの仲介により、台湾の大学において All English コース履修への指定校締結。これに伴い対面による進学説明会を下記の要領で行った。

- ・日時：12 月 15 日（月）16：00～16：50
- ・場所：竜ヶ崎第一高等学校会議室
- ・講師：(一社)台湾留学サポートセンター 大草晴菜日氏

4 課題と展望

(1) 世界大会につながる各種コンペティションへの参加実績はあるものの、大会規模や知名度、競技レベルに関する情報が十分に整理されていない。

(2) 本校では、海外進学支援に関するノウハウが十分に確立されていないことが課題となっている。特に、英語外部検定試験への対応や海外大学への進学手続きに関する支援体制の強化が求められており、これらの分野で実績を有する先進校から指導・助言を仰ぎたいと考えている。

茨城県立下館第一高等学校

(教諭 上林拓哉)

1. 本校の概要

本校は1923年(大正12年)に茨城県下館商業学校として開校し、1949年(昭和24年)に現在の茨城県立下館第一高等学校へと校名を変更した。令和2年度に附属中学校を併設し、令和5年に100周年を迎えた。令和7年度には進学重視型単位制へ完全移行するなど、これからの時代を見据えた歩みを進めている。

「問いが発見へと変わる喜び」を大切にしながら、主体的で深い授業、生徒主体の学校行事や部活動、探究活動やDXハイスクール事業を通して、「様々な変化に積極的に向き合い、多様な人々と協働して課題を解決する力や、新たな価値を創造する力を持つリーダー」育成を目指し、学校全体として様々な支援を行っている。

2. 連携校における特色ある取組み

■オーストラリア研修

約2週間にわたり、本校の附属中学3年生から高校2年生の希望者がオーストラリア・パースにて研修を行った。現地校では様々な教科の授業に参加し、生きた英語運用力を高めるとともに、ホームステイ、現地校生徒との交流等を通して多様な文化や価値観への理解を深めた。国際的視野と主体的に学ぶ姿勢を育成する研修となった。

■ベトナム・ハノイ研修

(SEKISYO JOB FAIR インターンシップ)

約1週間、ベトナム・ハノイで実施されたSEKISYO JOB FAIR インターンシップに本校生徒2名が参加した。日越大学や日本国際学校での交流、歴史遺産の見学や専門家との対話を通して異文化理解を深め、日本語教育や文化財研究への関心を高めるとともに、探究活動や将来の進路を考える機会となった。

■JICA 国際協力実体験プログラム成果発表会

JICA 筑波において、本校生徒が国際協力実体験プログラムの成果発表に参加した。多文化共生をテーマに、社会課題の背景や解決に向けた取組を発表し、他校生徒

との関わりを通して多様な価値観に触れた。国際協力を自分事として捉え、課題解決に主体的に関わる姿勢や視野の広がりを実感するとともに、国際社会における自らの役割について考える契機となる、今後の探究活動につながる学びの機会となった。

■台湾高校生との交流会

本校に台湾から高校生が来校し、本校生徒と英語を用いた交流やアクティビティを行った。言語や文化の違いを越えて相手の意図を理解しようとする姿勢の大切さを実感するとともに、英語を「使う」ことで伝わる喜びや課題に気づく機会となった。相互理解を深める中で、国際的な視野を広げ、主体的に関わる姿勢を育む交流となった。

■オックスフォード国際教育プログラム

本校生徒2名がオックスフォード大学への留学を行った。現地での学びや交流を通して、夢や目標の実現に向け自ら挑戦する姿勢の大切さを実感するとともに、情報を的確に取捨選択するクリティカルシンキングの重要性を学んだ。グローバル社会を主体的に生きるための視野と資質を育む貴重な経験となった。

3. 課題と展望

・地域を中心に、企業・大学・自治体と連携した産官学協働によるキャリア教育をさらに推進し、生徒が社会や地域課題を身近に捉え、将来の進路や生き方を主体的に考える学びを充実させる。

・AIを効果的に活用し、情報収集、分析、発信力を高めるとともに、思考力や判断力の育成につながる学習環境の整備を進める。

・カリキュラムについては、年間計画や運営の在り方を継続的に検証し、教育活動全体の改善につなげる。

・生徒、関係者へのアンケート結果を分析し、学習効果や運営上の課題を客観的に把握する。得られた結果を基に改善方策を検討し、教育の質の向上を図る。

茨城県立下妻第一高等学校

(執筆者名 教諭 南部 敏子)

1 本校の概要

1897年、明治30年4月に、茨城県立尋常中学校下妻分校として創立され、本年度で130年目を迎える伝統校である。令和4年度から附属中を併設し、募集定員40名(1学級)で課題解決型授業を実践している。高等学校は募集定員240名(6学級)で、全日制課程普通科単位制の学校として高い進学実績を上げる。グローバルで活躍できる「アントレプレナーシップ」を持った生徒の育成、「文武不岐」を理想とした人間性豊かな生徒の育成を目指し、特長的な取り組みを実践している。

2 連携校における特色ある取組

(1) 為櫻探究

企業、地域、大学と連携して、本校を核とした探究コンソーシアムを構築し、探究活動を通して、課題解決能力、創造的思考力、情報分析力、主体性といったアントレプレナーシップの重要な要素を育む。今年度は1年生に地域共創プログラムを提供し、生徒は下妻市の課題をグループで考察、企画提案書を作成し市への提言を目指している。2年生は自分に関心に合わせて9つのゼミに分かれ、専門的な知見を有する外部人材と連携し探究活動を進める。年度末に探究成果発表会を予定している。

(2) IGP(為櫻グローバルプログラム)

① 仏・エソンヌ県内学校交流プログラム

茨城県の友好提携都市であるフランス共和国エソンヌ県のフランソワ・トリュフォー高校とオンラインで交流している。今年度は事前に決めたテーマで意見交換を行い、さらに音楽の授業から和楽器演奏を配信した。昨年度交流3年目で相手校生が来校し、一緒に授業や部活動に取り組んだこともあり、活動は年々希望者を増やしている。

② オーストラリア語学研修

3月にオーストラリア・ブリスベンにて11日間の語学研修を実施している。事前研修を7回、現地研修、事後研修1回の他、探究テーマを決めて現地研修に臨み、研修後は成果発表会を設けている。

③ イングリッシュセミナー

10月に1年生全員で福島・ブリティッシュヒルズにて2泊3日の研修を行う。年度ごとに、全員スピーチコンテストや、ビジネスプラン作成など、趣向を凝らし生徒の4技能向上を目指している。

④ 外部大会等への積極的参加

日頃の学びの成果を試す機会として、英語スピーチコンテストや暗誦コンテスト等の外部大会への積極的な参加を支援している。これまで多くの生徒が遺憾なく力を発揮し、関東大会や全国大会に出場している。

(3) その他

① 進学支援の充実

テラーメイドプログラムや大学出前授業、先輩講話を企画し、特長ある進学支援を実施している。さらに医学部・医学科、教育学部等、希望者の多い分野に特化した支援も充実させている。

② 東大倶楽部

難関大学進学支援として、課外授業を実施している。

3 WWL連携校としての取組

連携校として以下の4点に取り組んだ。

(1) 海外留学生の派遣

説明会を実施し、1名がアメリカ高校留学プログラムに応募、来年度9月からの留学に向け準備を進めている。

(2) 海外留学生の受け入れ

4月よりフィンランドからの留学生1名を受け入れている。

(3) 海外大学進学支援

昨年度(株)アイエスエイと海外大学進学推薦制度に関わる協定を締結し、1名が海外大学へ進学している。

(4) その他

茨城大学先取り履修に5名が参加したほか、茨城県WWL高校生フォーラムに3グループが出場し、他校生との学びの機会を得た。12月には全国高校生フォーラムに出場し視野を広げることができた。

4 課題と展望

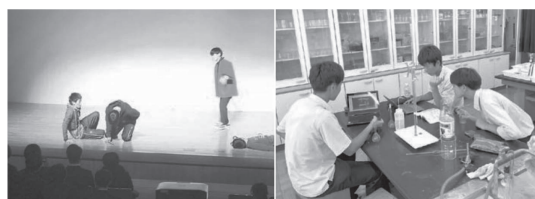
学外教育機関との連携強化、個別最適な学びに向けた環境整備が今後の課題である。

茨城県立水海道第一高等学校

1 本校の概要

水海道第一高等学校は、明治 33 (1900) 年に創立されて、今年で 125 年を迎える。令和 4 年度から附属中学校が設置され、現在募集定員 200 名 (6 学級)、全日制普通科単位制の学校として、県内における伝統校の一つとして様々な教育活動に取り組んでいる。

令和 5 年度から民間校長を迎え、外部企業との連携を軸とした探究活動に力を入れており、文科省・経産省主催の第 12 回キャリア教育推進連携表彰において最優秀賞を受賞し、その実践は県外からも注目を集めている。



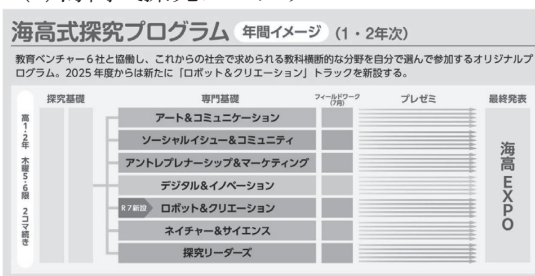
(2) 海高クリエイティブスクール

年間に 6 回程行われるクリエイティブなゲストを招いたトークイベント。本校 OB の映像クリエイターや俳優さん、また現役東大生やお笑い芸人など、多種多様なゲストの方々と接することで、生徒たちは実社会とのつながりを感じることができる。



2 連携校における特色ある取組

(1) 海高式探究プログラム



教育ベンチャー 6 社と協働し、これからの社会で求められる教科横断的な分野を自分で選んで参加するオリジナルプログラム。「トラック」と呼ばれる 7 つの分野の中から一つ選び、「専門基礎」「フィールドワーク」「プレゼミ」を経て、最終発表の場である「海高 EXPO」において探究活動の成果を発表する。

(写真はアート&コミュニケーションとネイチャー&サイエンス)

3 WWL 連携校としての取組

WWL が主催する各種事業への積極的な参加を生徒に促している。

4 課題と展望

WWL が主催する各種事業への参加率が低迷している。茨城大学の先取履修や HPAIR といった魅力的なプログラムについて、今後も生徒の参加を促していきたい。本校でも「トビタテ! 留学 Japan」の支援を獲得し、短期留学できた生徒がおり、語学研修や留学に対する機運が高まってきている今こそ、ぜひ WWL 関連事業をとおして、国際社会で活躍できる人材を育成していきたい。

(執筆者名 柴崎文彦)

茨城県立並木中等教育学校
(企画研究部 荒山・富山)

1 本校の概要

本校は、平成20年(2008年)4月に県内初の公立中高一貫教育校として開校し、今年で18年目を迎えた。校是である「Be a top learner!」(高き学習者たれ!)のもと、「能動的な学びのできる『人間力』を備えたグローバルリーダーの育成」に向け、日々教育活動に取り組んでいる。このようなグローバルリーダーを育成するために、本校では「科学教育」「国際教育」「人間教育」の3本の柱のもと、探究活動や体験活動を重視した教育を展開している。特に、「科学教育」では、平成24年(2012年)から文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、筑波研究学園都市の一角に位置しているという強みを最大限に活かして、大学や研究機関などと連携したさまざまな行事を実施している。現在、第Ⅲ期目(令和4年度から令和8年度までの指定校)の4年目として、「理数探究」を中心とした探究型カリキュラムの開発、それを地域の拠点校として発信・普及し、外部組織と連携や国際連携による「開かれた学校」システムの構築、科学技術人材育成に関する取り組みを研究し、新しい時代を生き抜く力である「探究力」「論理力」の育成に取り組んでいる。

2 連携校における特色ある取組

(1) 学校行事

- ①ブリティッシュヒルズ語学研修(2年生)
- ②ニュージーランド語学研修(4年生)
- ③ベトナム修学旅行(5年生)

(2) 学年行事

- ①ワールドキャラバン(1年生)
社会科とのクロスカリキュラムとして、本在住の4か国からのスピーカーに文化交流を行う。茨城県国際交流協会の事業。
- ②JICAの研修生との交流会(3年生)
JICAの4か国からのスピーカーに各国紹介をしてもらいながら文化交流を行う。また、各研修員の方の研究について説明を受ける。
- ③JICA留学生とのディスカッション(5年生)
JICAを通して日本に留学中の学生の方をお迎えし、小グループで個人課題探究の発表、質疑応答やディスカッションを行う。
- ④外務省ODA講座(5年生)
ベトナム修学旅行の事前学習として外務省

の専門官から、日越関係、ベトナムの現状について学ぶ。

⑤国際交流ディスカッション(5年生)

日本在住の海外8か国からのディスカッションパートナーを招き、SDGsのテーマについて小グループでディスカッション及びプレゼンテーション作成と発表を行う。

⑥国際教育講演会及び座談会(1~5年)

国際機関勤務や国際的に活躍する講師による、仕事の内容や経験、外から見た日本と国際関係、国際社会で生きる心構えなどについての講演と希望生徒との座談会。

(3) 希望参加行事

①グローバル・カフェ(放課後)

国内の国際機関や国際問題を研究している識者または日本在住の外国の方を招いて行う座談会。

②フィールド・トリップ(代休や休暇中など)

国際機関を訪れ、施設見学や講義を通して、異文化や国際的な仕事、について学ぶ。

③第二外国語講座(放課後)

茨城県国際交流協会の講師によるフランス語講座シリーズ。

④オンライン国際交流(放課後)

海外の中・高生との文化交流や海外の講師による講義。これまで交流国は、韓国、中国、ラオス、タイ、インド、アメリカ、オーストラリア、カンボジア、ジョージア、ヨルダン、インドネシア、ニュージーランド等。

(4) 授業でのオンライン交流

時差がない韓国の中学校や高校との交流。英語の授業を利用し、①文化交流や自由会話
②同一教材を学習して、両国の外国語指導助手のファシリテーションで授業。
(言語：英語)

3 WWL 連携校としての取組

(1) WWL 関連の取り組み

柳井スカラーズキャラバン

「現役海外大生と考える進路選択とその先」
柳井財団奨学生として、アメリカ、イギリスに留学している大学生と共に「自分らしい進路選択」を考えるプログラム。

4 課題と展望

- (1) 科学教育・国際教育・人間教育を通して、グローバル・グローバルに活躍できる人間力の育成
- (2) 能動的な学びのできるグローバルリーダーを育成するためのさらなる挑戦

1 本校の概要

昭和 56 年に県立総和高等学校として創立した本校は、平成 25 年に茨城県内 2 校目の中高一貫校、県立古河中等教育学校として開校した。多くの卒業生が国公立大学や有名私立大学へ進学しており、在校する生徒も同様に高い目標を持って学習に励んでいる。

創立 13 年目を迎え、生徒の実態が少しずつ変わる中、本校の目指す生徒像である、①広い視野と柔軟な思考力、豊かな感性を備え、新たなものを創造(Create)できる生徒②さまざまな分野への好奇心や探究心にあふれ、自ら進んで真理の追究や議題の解決に挑戦(Challenge)できる生徒③高い目標と強い意志をもち、地域や日本、国際社会の発展に貢献(Contribute)できる生徒を育成すべく、多様な取り組みを行っている。

2 連携校における特色ある取組

(1) ニュージーランド語学研修

3 年次では希望者を対象に、約 10 日間の語学研修を行っている。研修を通して、異文化理解と語学力の向上を図るとともに、グローバルな視野を養う。

(2) 英語スキルアップ研修・TGG 研修

3 年次の 3 月にニュージーランド研修に参加することを見据えて、1 年次で 1 回、2 年次で 1 回、3 年次で 2 回、英語のスキルアップ研修を実施しており、英語力やコミュニケーションスキルの育成を図る。また、2 年次では Tokyo Global Gateway での語学研修を行っている。3 年次では、外国人留学生に古河市内を案内するという実践を行う。

(3) Global Studies Program

1 年次から 4 年次までの異文化理解、語学研修の集大成として、夏休みに 4 年次生全員を対象に、5 日間のプログラムを実施している。多様な外国人留学生とともに、社会課題等に取り組むことで批判的思考力を養い、自分の意見を発表することで英語コミュニケーションスキルだけでなく、表現力を培う。

(4) 探究活動

前期生は各年次においてテーマを設定し、外部への取材や職場体験、プロジェクトの企画等を行う。

4 年次ではグローバル、アントレプレナーシップ、サイエンス、テックの 4 つのコースに分かれ、特別講義を受けるとともに、個人またはグループで課題を設定し、探究する。5 年次では個人研究に取り組み、さらに探究を深めていく。12 月には 5 年次を中心に探究発表会を行い、探究活動の成果を下級生に発表する。

段階的な探究活動を通して、批判的思考力や課題解決能力を養い、自ら進んで課題を発見し、その解決のために真理を追究できる力を養おうと取り組んでいる。

(5) 科学教養講座

科学的思考力の育成のために、1・2 年次では大学の先生をお招きし、出前講座や、博物館見学、研究所訪問を実施している。

(6) 医学部進学研究会の設置

医学部進学を志望している生徒を対象に、「医学部進学研究会」を設定している。大学の出前授業や医療従事者の講演会、大学や病院の見学、医学生との座談会等を行い、生徒の職業観や素養を養っている。

3 WWL 連携校としての取組

今年度 WWL 連携校としての取り組みはありません。

4 課題と展望

(1) 中高 6 年間の連携した指導

相互授業参観や情報共有を頻繁に行い、6 年間を見通した一貫性のある授業展開を行う必要がある。目指すべき生徒像や育成すべき能力の共通理解を図り、授業改善をしていく必要がある。

(2) 探究活動

今年度の 4 年次から、4 つのコースに分かれて、課題研究を行った。活動内容やスケジューリング等において課題があり、次年度以降改善していきたい。

第5章 グローバル人材育成指標

変化が激しく先行き不透明な時代を生き抜くために、本校では学力（認知能力）だけでなく、協調性、コミュニケーション力などの非認知能力も重要であると考え、両者をバランスよく育てていくことを目指している。そのために、「創造力」「活用力」「協働力」「挑戦力」の4つの力の育成を柱とし、これをさらに細分化した17の資質と評価項目を定めている（表1）。昨年度9月下旬に中等1年次から4年次の生徒（現在の2年次生～5年次生）を対象に、これら17の資質についての意識調査を実施した。今年度も同時期に1年次～5年次の生徒を対象として同様の調査を実施した。現2年次生から5年次生は2回目の調査となり、現1年次生は入学後間もない5月初旬に1回目を、9月下旬に2回目を実施した。

表1 グローカルリーダー資質表

階層1	階層2(資質能力)	階層3(評価項目)
探究 基礎力	①情報検索	必要な情報を適切に集めることができる
	②論文の書き方(Abtractの書き方含む)	的確な形式と文章で思考を表現できる
	③発表の仕方(プレゼンテーション)	自分の考えを適切に発表し、共感を得ることができる
	④議論の仕方(ディベート・ディスカッション)	多角的・実証的に議論を進め、生産的な成果を出すことができる
	⑤統計の扱い方	収集した情報を適切に分析することができる
活用力	⑥分析的思考力	ものごとを筋道立てて考えることができる
	⑦多言語・コミュニケーションスキル	母語以外の言語でコミュニケーションを図ることができる
	⑧自律的学習	計画的に学習を進め、自分の学習を振り返ることができる
	⑨自己分析認識	自分自身の意欲・傾向や行動を客観的に分析することができる
協働力	⑩責任感	自分のとった行動に責任をもつことができる(周りのせいしない)
	⑪多様な価値観	異なる文化や信条、価値観、習慣に対して敬意を払い、柔軟に接することができる
	⑫共感	他者の気持ちを理解し、チームにおいて協力的な関係を創ることができる
	⑬柔軟性・適応力	話し合いにより自分の意見を修正したり、状況により決断を変更したりすることができる
創造力	⑭問題解決能力	正解のない課題に対し、冷静な視点で提案し、新しいものを創り出そうとする
挑戦力	⑮企画を実現させる(アントレプレナーシップ)	自分の考えを様々な支援を受けながら現実化することができる
	⑯何事にもチャレンジ	失敗を恐れずに何事にもチャレンジしようとする
	⑰自己効力感(I can do it)	(課題解決に向けた)自分の信念に自信をもち、それを表現することができる

【調査】

(調査対象) 中等1年次から中等5年次の生徒 584名。

(調査時期)1回目 現中等2年次生～5年次生 令和6年9月26日 (回収データ n=435)

現中等1年次生 令和7年5月1日 (回収データ n=117)

2回目 現中等1年次生～5年次生 令和7年9月30日 (回収データ n=531)

(調査方法)

アンケートは、今年度も昨年度と同様の方法で行った。アンケートの内容や回答方法については、昨年度の紀要を参照されたい。

なお、今年度の1年次生5月の実施は、昨年度のアンケート結果が異学年で大きな差がなかったことから、本校独自のカリキュラムにあまり慣れていない段階で実施したらどのような初期値が得られるかを見るために17の資質項目の意識調査のみを回答する形で行った。

【結果と考察】

表2は、17の資質項目について、中等1年次～5年次までの1回目と2回目の調査の平均と標準偏差を集計した結果である。

表2 グローカルリーダー資質表17項目の意識調査 各学年の平均と標準偏差

	1回目		2回目		1回目		2回目		1回目		2回目		1回目		2回目		1回目		2回目		2回目	
	中等1年初期		中等1年		旧中1		中等2年		旧中2		中等3年		旧中3		中等4年		旧中4		中等5年		全学年の平均	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
①情報検索	4.0	0.7	4.2	0.6	3.9	0.6	4.1	0.7	3.9	0.8	3.9	0.7	4.1	0.6	4.1	0.7	4.1	0.7	4.2	0.8	4.1	0.7
②論文の書き方	3.7	0.8	3.8	0.8	3.7	0.7	3.6	0.9	3.4	0.8	3.5	0.9	3.5	0.9	3.7	0.9	3.5	0.8	3.8	0.8	3.7	0.9
③発表の仕方	3.8	0.9	3.8	0.9	3.7	0.9	3.8	0.9	3.5	1.0	3.6	0.9	3.7	0.8	3.7	0.9	3.7	1.0	3.9	1.0	3.8	0.9
④議論の仕方	3.7	0.9	3.7	0.8	3.5	0.7	3.6	0.9	3.5	1.0	3.5	1.0	3.5	0.9	3.4	1.0	3.3	1.0	3.6	1.0	3.6	1.0
⑤統計の扱い方	3.8	0.9	4.0	0.9	3.7	0.8	3.9	0.8	3.6	0.8	3.7	0.8	3.7	0.8	3.9	0.8	3.7	0.8	3.9	0.8	3.9	0.8
⑥分析的思考力	3.9	0.9	3.9	0.9	3.8	0.8	3.8	0.9	3.6	1.0	3.6	1.0	3.8	0.8	3.8	0.8	3.6	0.8	3.8	0.9	3.8	0.9
⑦多言語・ コミュニケーションスキル	2.7	1.1	2.8	1.2	2.7	1.1	2.8	1.2	2.9	1.0	2.9	1.1	2.9	1.2	2.9	1.1	2.9	1.2	3.2	1.2	2.9	1.2
⑧自律的学習	3.7	1.0	3.4	1.1	3.4	1.1	3.2	1.1	3.0	1.1	3.1	1.1	3.0	1.2	3.1	1.2	2.7	1.1	3.1	1.1	3.2	1.1
⑨自己分析認識	3.8	0.9	3.8	1.0	3.7	0.9	3.6	0.9	3.6	0.9	3.7	0.9	3.8	1.0	3.8	1.0	3.7	0.9	3.8	0.9	3.8	0.9
⑩責任感	4.2	0.8	4.2	0.8	4.1	0.8	4.2	0.8	3.9	1.0	4.0	0.9	3.9	0.9	3.9	0.9	3.9	0.9	4.0	0.9	4.1	0.9
⑪多様な価値観	4.1	0.8	4.1	0.8	4.1	0.8	4.1	0.9	4.0	0.9	4.1	0.8	4.2	0.9	4.1	1.0	4.3	0.8	4.2	0.8	4.1	0.9
⑫共感	4.1	0.8	4.2	0.8	4.1	0.7	4.2	0.8	4.0	0.9	4.0	0.8	4.1	0.8	4.1	0.9	4.1	0.8	4.1	0.9	4.1	0.8
⑬柔軟性・適応力	4.3	0.8	4.3	0.7	4.1	0.7	4.1	0.7	4.1	0.9	4.1	0.8	4.2	0.8	4.2	0.7	4.0	0.9	4.1	0.9	4.2	0.8
⑭問題解決能力	3.9	0.9	3.8	0.9	3.9	0.8	3.8	0.9	3.5	1.0	3.6	1.0	3.8	0.9	3.6	0.9	3.6	1.0	3.8	0.9	3.7	0.9
⑮企画を実現させる	3.6	1.0	3.7	0.9	3.5	0.8	3.6	0.9	3.3	1.0	3.3	1.0	3.2	0.9	3.4	1.0	3.4	0.9	3.5	1.0	3.5	1.0
⑯何事にもチャレンジ	3.7	1.1	3.7	1.1	3.5	1.1	3.5	1.1	3.3	1.2	3.2	1.2	3.4	1.1	3.5	1.1	3.1	1.1	3.5	1.2	3.5	1.1
⑰自己効力感	3.8	1.0	3.8	0.9	3.7	0.9	3.6	1.0	3.5	1.1	3.4	1.0	3.6	1.0	3.7	0.9	3.5	1.0	3.7	1.0	3.6	1.0

全体的な結果の傾向は、昨年度と同様⑪多様な価値観、⑫共感、⑬柔軟性・適応力の項目でどの年次も4点台の平均となっていた。一方で、全体を通して低い数値だった項目は、⑦多言語・コミュニケーションスキル⑧自律的学習で2点台後半～3点台前半の数値であった。1年次生の初期値を5月初旬に取ることで9月の数値に変化があるのではないかと考えたが、あまり変化は見られず他学年と似たような結果になっていた。

今年度は2回目の調査なので、各年次を前年度と比較してみると、4年次生、5年次生で数値が上昇している項目が多いことが分かる(下線を引いた数値)。特に5年次生では17項目中15項目で数値が上昇していた。これは、様々な経験が他の年次より多いこと、学習の積み重ねによるものであるとも考えられる。それらの項目の1つ⑦多言語・コミュニケーション

ブスキルについてさらに詳しく調べてみた。平均の数値が2.9と、全体平均が低い項目であるが、5年次生の平均は3.2である。5年次の生徒について、留学や海外研修を経験した生徒のデータのみ抽出して調べると平均が3.9であり、中でも3週間～1年の期間を一人で留学した人（8人）の平均は4.6であった。それ以外の生徒の平均は2.8であった。留学や海外研修などの経験の他にも、英語学習や検定、その他の要因もあるかもしれないが海外での経験者の数値が高いことは注目できる要因ではないかと思われる。

次に、「一番力がついていると思う資質」「これから特に力を付けたいと思う資質」について選択してもらった度数を集計した結果を表3、表4に示す。

表3 17の項目のうち一番「力が付いている」と思う資質

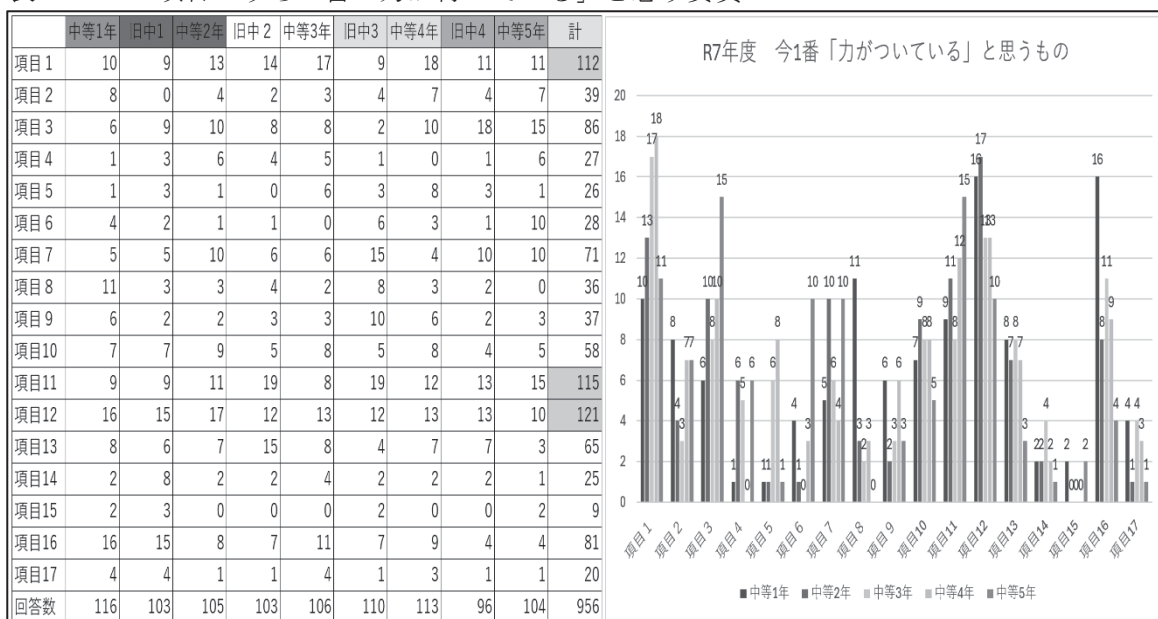
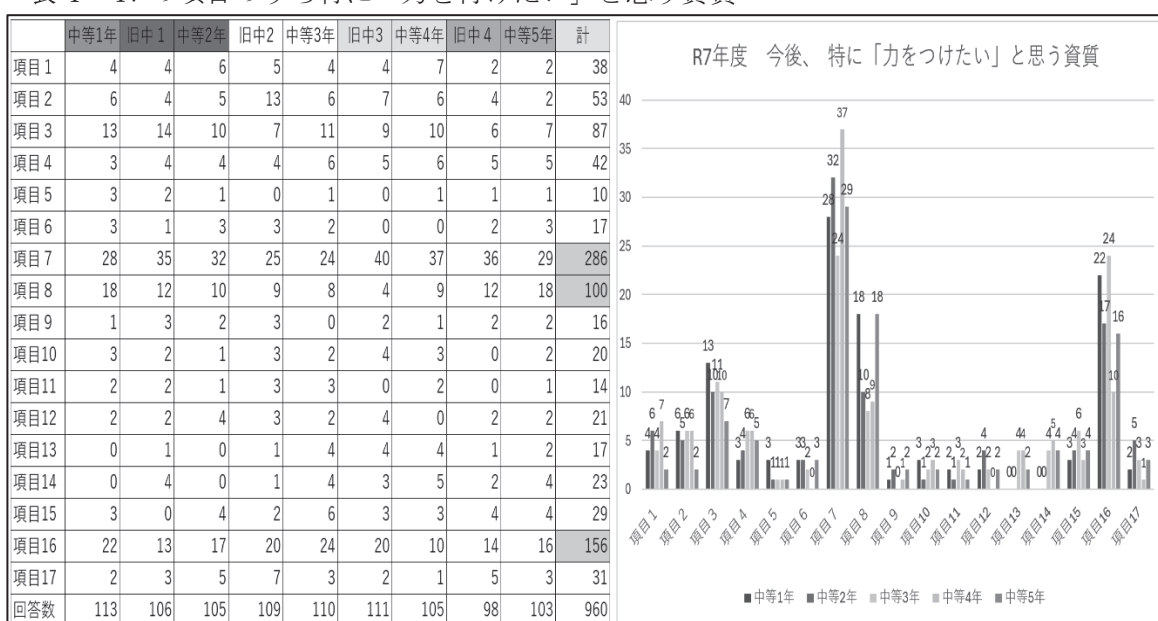


表4 17の項目のうち特に「力を付けたい」と思う資質



これらの結果についても、1年次～5年次まで、ほぼ同様の傾向が見られていた。表3、表4で項目を選択した人の累計を表の右端に算出し上位3項目について色付けした。理由を記述した回答内容を見ると、上の年次ほど具体的な場面でこのスキルが向上したことを詳細に記述していた。

(できているという意識が高かった項目) ①情報検索①多様な価値観、⑫共感

①では、教科の授業や探究活動で調べる機会が多いこと、多くの情報に触れる中で信頼できる情報を選択できるようになったこと等の記述があった。項目①⑫では昨年度同様の理由が挙げられていて、①ではGCPの授業、海外経験、ALTとの関わりが、⑫では、部活動や授業で行うグループワークやグループでの話し合いが理由に挙げられていた。

(課題と捉えている意識が高い項目) ⑦多言語・コミュニケーションスキル⑧自律的学習
⑩何事にもチャレンジ

理由を記述した回答内容では、昨年度と似た記述がされていた。⑦では、「英語が話せたら役に立つ、世界中の人とコミュニケーションを取りたい」など将来のことを考えている記述内容が多かった。⑧では、定期テストの機会を生かしていないこと、計画的に物事を進められないこと等が記述されていた。⑩では、失敗を恐れて挑戦しないことが多いという記述が多かった。失敗しても何度でも挑戦していけるように、失敗に対する周囲の寛容な態度や再チャレンジを勇気づけるような周囲の関わりが挑戦力を育むのではないかと考える。

【今後に向けて】

今年度は2回目の調査であった。平均の数値が他年次と比較してそれほど差がなかったり、同一集団内において大きな差が見られなかったりしたところもある。これは、回答者の判断基準がそれぞれ個人に委ねられているからとも言える。何がどれくらいまでできたら、「できる」と回答するのか。年次が上がるにつれて学習する内容は高度な内容になっていくので、例えばある教科で「この分野では、1年次でこれくらいできたらいい、2年次でこれくらいできたらいい」など到達目標は異なる。つまり、教科によってルーブリックができていて、生徒も教員も同じ判断基準でスキルの向上を目指すことが可能になる。しかし、17の資質についてそれぞれの項目ごとにルーブリックを作成することは、非常に複雑で大変な作業であり、作成してからも修正作業が絶え間なく出てくることが予想される。ルーブリックを明文化することでその視点にとらわれすぎて本当にスキルの向上が計れているのかに迷いが生じたりもしそうである。①～⑩の資質についての5段階評価の平均値は、参考値としてデータ収集を継続しながら、むしろ、質問18～21の回答内容を重視して個人の成長を促す働きかけを考えてみてはどうか。生徒が1年間を振り返って17のスキルの中でも特に「力が付いたと思うスキル」「今後力を付けたいと思うスキル」とその理由を毎年記録し、個人のやる気を丁寧に見ていくようなポートフォリオ的な個人カルテなどがあれば、生徒の成長を助けることになるのではないかと考えている。信頼性・妥当性のある市販の非認知能力テストの開発もされてきたようなので、それらの利用も視野に入れ、そのようなテストと17の資質との関連を図り、本校独自の17の資質の向上も考えてみたい。

第6章 研究開発の成果と課題

6.1 研究開発の成果目標

申請時に提出した本事業の2年目以降の目標は以下のとおりである。(△目標達成▼目標不達成)

短期的目標(令和7～8年度)

▼ア 連携校12校を含めたDLネットワークからの海外留学生20名以上→10名以上

▼イ 連携校12校を含めたDLネットワークにおける海外留学生の受け入れ30名以上→15名以上

▼ウ 連携校12校を含めたDLネットワークからの海外大学体験研修の参加者20名以上→10名以上

△エ 連携校12校を含めたDLネットワークからの高校生会議への参加者50名以上→25名

△オ 連携校12校を含めたDLネットワークにおける「ダイバーシティ」に関する講義やワークショップの受講者100名以上→50名以上

△カ DLネットワークの評価委員会の設置と委員会の開催

上記の短期的目標値は、当初2～3年目をあわせて達成するものであったため、令和7年度単年の数値と比較できるよう、ア～オについては数値目標を半分にした。以下にそれぞれの目標に関連する成果と課題をまとめた。

(1) 海外への留学(目標ア)

拠点校においては、昨年8名の留学生が出たが、今年度はその半分の4名であった。進行する円の弱体化と不安定な世界情勢により、生徒の内向き志向が進みつつあることを憂慮している。連携校における留学生をあわせても10名には満たなかった。働き方改革下で、誰が留学促進の業務を負うのかなど組織的な課題も大きいと思われる。

(2) 海外からの留学生の受け入れ(目標イ)

年々日本への留学希望者が増えている中、留学生の受け入れは生徒への波及効果が高く、生徒の成長にも非常に寄与する面が大きい。本校ではできる限り多くの留学生を受け入れている。しかし今年は大規模な校舎改修工事が始まり、生徒が落ち着かない中での受け入れは負担が大きい。半年は受け入れを見合わせ、6名の受け入れにとどまった。しかしそうした中でも、生徒たちが自主的に「留学生チューター制度」を立ち上げ、生徒たち自身で留学生を面倒みよう、という動きが出てきたことは大きな成果であった。連携校をあわせても目標値の15名には達しないが、これは連携校の地域にホストファミリーとなってくれる家庭が少ない、という実情も影響しており、留学生受入は、学校だけでなく地域も含めた包括的なサポートが必要であることを痛感している。

(3) 海外大学体験研修(目標ウ)

円安が進む中、一つの学校だけで海外研修者を充足することが難しくなっている実情を踏まえ、

連携校の横のつながりで実施を計画した海外体験研修であったが、修学旅行や類似の海外研修ですでにマレーシアを中学時に体験している学校が多く、今回連携校からの参加はゼロであった。しかし、近隣県のグローバル教育に力を入れている学校から9名の生徒の参加があり、なんとか16名の最少催行人数を集めることができ、目標値には達しなかったが、合同で海外研修を実施する、という当初の目的は果たすことができた。他県の生徒と交流を深めることができたのは本校生徒にとっても非常に有意義な経験であった。

(4) 高校生会議(高校生フォーラム)(目標エ)

WWLのメインイベントである茨城県高校生フォーラムは、連携校あわせて62名の生徒が参加し、連携校以外の一般校からの参加もあった。また全国高校生フォーラムへの茨城県からの参加者は12名であり、あわせると大きく成果目標値を上回っている。生徒たちがグローバルな探究課題について学校を越えて英語で発表し学びあうことの楽しさ・有意義さを実感できた。探究と関連させたイベントであったことが成功の一因だと思う。

(5) ダイバーシティに関する講義(目標オ)

ダイバーシティ研修が茨城県高校生フォーラムと同時に開催だったため、参加生徒は62名であり、目標の50名を上回った。英語でディスカッションをする経験は多くの生徒がとても有意義だったと回答していた。

(6) 評価委員会の設置(目標カ)

今年度より実証委員会を設置し、2/16に開催することができた。突然の事業終了により、実証委員会での助言を事業に生かすことができないのは残念であるが、WWL事業によって生まれた各校の有意義な取組を今後どのように継続していけるかについて、実証委員会の助言を連携校と共有していきたい。

2 最後に

当初の予定より短い2年間の取組で終わることになった本事業であるが、当初は拠点校だけで実施していた各取組が徐々に拠点校にも広がり、あと1年間の継続でさらに連携校への波及が進んだのではないかと、今回の突然の事業終了が残念でならない。しかし、いくつかの学校からは「WWLを通して連携した留学や海外大学進学サポート業者とは継続して連携してよいか」などの問い合わせもあり、今後は各校がこれまでの取組を生かして、グローバルな学びを発展させていく兆しも見えている。茨城県WWLが撒いたグローバル教育の種が、各校で芽吹き、大きく育ってくれることを祈るばかりである。